

41863

教科書文庫

4
815
44-1933
20000 52425

Kodak Gray Scale



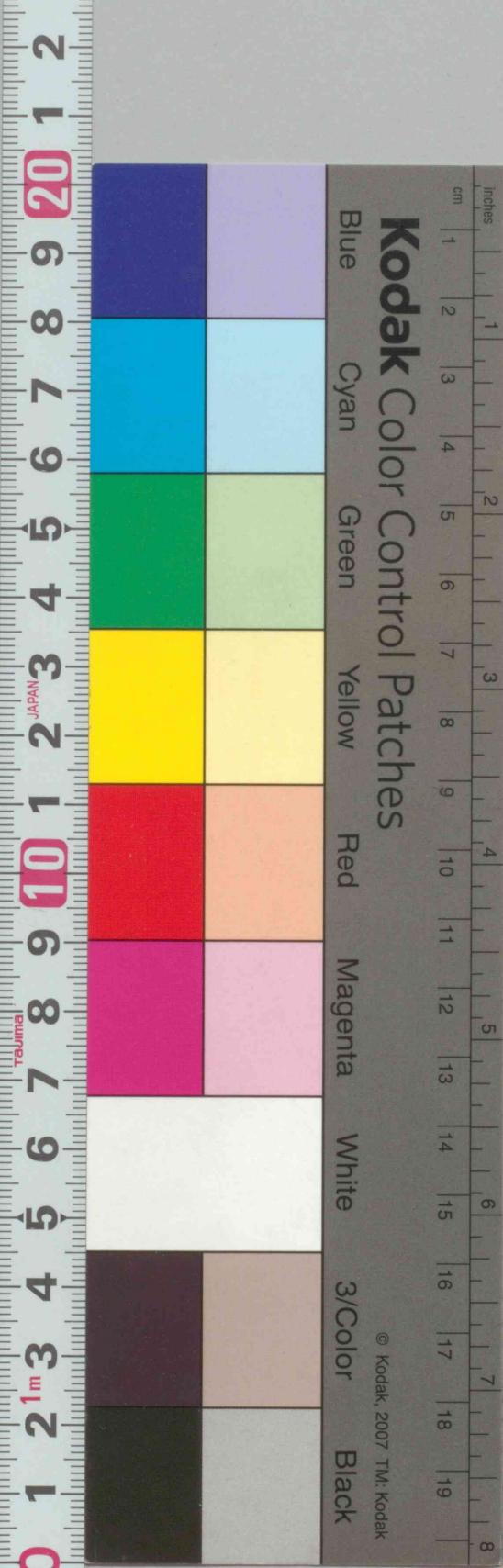
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Y019
資料室

行六
中等
新國文典

文學博士吉澤義則著



資料室

濟定檢省部文

用科語國校學業實 日十月十年八和昭

教科書文庫

4

815

44-1933

2000052425

375.9
Y019

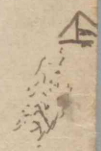
行六
中等
新
國文
典

広島大学図書

2000052425



Two
shiro
for



例言

- 一 本書は中學校及び之と同程度の中等學校に於ける文法教科書に充てんが爲に、その教授要目に準據して編纂せるものなり。
- 一 本書は成るべく煩瑣なる理論を避け、極めて平易簡明なる説明を與へ、生徒をして容易に日本文法の一般的智識を了得せしめ、讀書に作文に直に之を應用せしめん事に力を用ひたり。
- 一 近年、文の組織を説きつゝ、品詞の意義用法を述ぶること行はる。然れども始めて文法を學ぶ者にとりては、猶品詞より入りて文に及ぶ方理解し易く、且つ適當なりと思惟し、本書はその順序に従ひたり。
- 一 本書の編纂に當り、助動詞の意義用法、動詞と助動詞及び助動詞相互の接續、助詞の意義用法等、學生の誤り易きものの説明には特に

意を用ひたり。

- 一 文例は成るべく生徒の實生活に緊密なるものを選び、作文及び讀本との聯絡に注意せり。

大正十二年九月

著者識す

五訂に當りて

- 一 主として練習問題の一層自然にして適切に、しかも文學的趣味の豊なるものを選び、且つ其の數を増加して以て所期の目的を達せんことを努めたり。

昭和四年八月

著者識す

六訂に當りて

- 一 本書は實業學校用として適切なるやう大修正を加へたり。
- 一 動詞は活用形を先に、活用の種類を後に説くこととしたり。
- 一 五訂版に比し口語法の分量を相當に増加したり。
- 一 説明の文はすべて口語體を用ふることとしたり。

昭和七年七月

著者識す

訂六 中等新國文典 目次

單 語 篇 (上)

第一章	單語	一
第二章	名詞	二
第三章	數詞	四
第四章	代名詞	六
第五章	動詞	一〇
第六章	形容詞	一一
第七章	副詞	一三
第八章	接續詞	一六
第九章	感動詞	一九

第十章 助動詞

..... 三〇

第十一章 助詞

..... 三三

單語篇 (下)

第一章 文語動詞の活用

..... 三七

一 文語動詞の活用形

..... 三七

二 文語動詞の活用の種類

..... 三九

(一) 四段活用

..... 三九

(二) 上二段活用

..... 四〇

(三) 上一段活用

..... 四一

(四) 下二段活用

..... 四二

(五) 下一段活用

..... 四三

(六) カ行變格活用

..... 四四

(七) サ行變格活用

..... 四五

(八) ナ行變格活用

..... 四六

(九) ラ行變格活用

..... 四七

三 動詞活用の識別法

..... 四七

第二章 口語動詞の活用

..... 四九

一 口語動詞の活用形

..... 四九

二 口語動詞の活用の種類

..... 五〇

(一) 四段活用

..... 五〇

(二) 上一段活用

..... 五一

(三) 下一段活用

..... 五二

(四) カ行變格活用

..... 五三

(五) サ行變格活用

..... 五四

三 口語動詞活用の識別法

..... 五四

第三章 形容詞の活用

..... 五五

第四章 音便

..... 五五

第五章 文語助動詞の種類及活用

..... 五三

一 受身の助動詞	三
二 可能の助動詞	三
三 使役の助動詞	三
四 崇敬の助動詞	三
五 時の助動詞	六
六 推量の助動詞	七
七 打消の助動詞	七
八 指定の助動詞	七
九 咏嘆の助動詞	七
一〇 比況の助動詞	七
一一 希望の助動詞	七
第六章 口語助動詞の種類及活用	六
一 受身の助動詞	六
二 可能の助動詞	六
三 使役の助動詞	六

四 崇敬の助動詞	七
五 時の助動詞	八
六 推量の助動詞	八
七 打消の助動詞	八
八 指定の助動詞	八
九 比況の助動詞	八
一〇 希望の助動詞	八
第七章 文語動詞と文語助動詞との接續	八
附 助動詞相互の接續	八
第八章 口語動詞と口語助動詞との接續	九
第九章 助詞の用法	九
一 ぞなんこそ	九
二 やか	一〇
三 ばともども	一〇

四と	一〇七
五だにすらさへ	一〇八
六なな	一〇九
七ばやなむ	一一〇
八にへ	一一〇
九がにを	一一一
一〇てで	一一一
第十章 接頭語・接尾語	一一四
第十一章 品詞の轉成	一二六
第十二章 紛れ易い品詞	一二九
文 章 篇	
第一章 文の成分	一三五
第二章 文の成分の位置と省略	一三五
第三章 句及び節	一三九

第四章 文の構造上の種類	一四三
第五章 文の性質上の種類	一四四
附録 文法上許容ニ關スル事項	
表	

第一表	文語動詞活用表	口語動詞活用表
第二表	文語形容詞活用表	口語形容詞活用表
第三表	文語助動詞活用表	
第四表	口語助動詞活用表	
第五表	動詞助動詞接續法	
第六表	接續助詞と動詞・形容詞との接續法	

目次終

目次

第一章 單語
第二章 複語
第三章 句讀
第四章 文法
第五章 語法
第六章 修辭
第七章 文學

Janpan
27c
30
27c
30

訂六 中等新國文典

文學博士 吉澤義則 著

單語篇(上)

第一章 單語

一 大君の惠の露はあまねく民草を露せり。

二 燈火の影は水に映りて星の如く花の如し。

右の例で傍線の引いてある一つ一つの語は、皆それと或意味をもつてゐる。かやうに或意味をもつてゐる一つ一つの語を單語といふ。さうして右の例のやうに、いくつかの單語が集ま

品詞
文法
句讀
單語

第一章 單語

文章
單に文ともいふ

口語

文語

品詞

つてあるまとまつた考を述べてあるものを文章といふ。文には文語文と口語文とがある。従つて文法にも文語と口語との間には相違がある。單語をその意味や働きや形の上から之を左の十種に分ける。その各を品詞といふ。

- 名詞
- 數詞
- 代名詞
- 動詞
- 形容詞
- 副詞
- 接續詞
- 感動詞
- 助動詞
- 助詞

第二章 名詞

- 一 重盛は平家の柱石たり。
- 二 山には將軍を祭れる神社あり。

名詞

練習一

三 瓢箪から駒が出る。(口)

四 儉約は美德である。(口)

右の例で、傍線の引いてある語は皆事物の名をあらはしてある。かゝる語を名詞といふ。

練習

一、次の文中の名詞を指摘せよ。

- (イ) 黄金の鎌のやうな弦月が高く鋭く光を放つてゐる。
- (ロ) 調子のよい蜜柑採の歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはしてのどかに聞えてくる。
- (ハ) 一切經は佛教に關する書籍を集めた叢書である。
- (ニ) 春來れば雪消の澤に袖垂れてまだうら若き若菜をぞ摘む。
- (ホ) 東郷大將は明治三十七八年戰役に偉勳を立てしにより、人呼んで東洋の

- ネルソンと稱す。
 - (へ) 廉潔質素克己忍耐の氣性を鍛錬せねばならぬ。
 - (ト) エヂソンは米國の人だが世界の恩人だ。
- 二、名詞の定義を下げ。

第三章 數 詞

- 一 一を聞いて十を知る。
- 二 一寸の蟲にも五分の魂。
- 三 鉛筆一ダースの價五拾錢なり。
- 四 太郎は三の組の第二番である。(口)
- 五 六七合目以上は、空氣が稀薄であるから、人の呼吸數は下界の二倍となる。(口)

數詞

練習二

右の例で「一・十・一寸五分一ダース五拾錢二倍」は事物の數量をあらはし、「三の組」「第二番」「六七合目」は物の順序をあらはしてゐる。かやうに事物の數量又は順序をあらはす詞を數詞といふ。

練習

一、次の文中の數詞を指摘せよ。

- (イ) あの角から三軒目が僕の家です。
- (ロ) 十で神童十五で才子二十過ぎてはたゞの人。
- (ハ) 石は評判通りに大きい。一つで五間も十間もあらう。仰山なもんぢや。この石一つ運ぶに、とても千人や千五百人の力では運べるものでない。
- (ニ) 僕は受験生三百人の中で十五番で入學した。
- (ホ) 五十圓の旅費の中でも、もうその六割をつかつてしまった。
- (ヘ) こゝに書物五巻と手帳三冊と半紙が二帖あります。

(ト) 太刀一ふり長刀二えだ槍三すぢ旗五ながれのふりえだすぢながれ等を
助數詞といふ。
二、數詞の定義を下せ。

第四章 代名詞

代名詞

- 一 予は昨日かれを病院に見舞ひき。
予は昨日かれを病院に見舞ひき。
 - 二 こはわれの知る所にあらず。
こはわれの知る所にあらず。
 - 三 汝は誰ぞ、そを何處にか負ひて行く。
汝は誰ぞ、そを何處にか負ひて行く。
 - 四 こゝからあそこまではそんなに遠くはない。(口)
 - 五 農夫は山のあなたへ歸りたり。
- 右の例で傍線の引いてある語は皆名詞の代りに用ひられてゐる。かゝる語を代名詞といふ。

人代名詞 指示代名詞

又右の例中、予かれわれ汝誰は人の名の代りに用ひられてゐるもので、これを人代名詞といひ、こそ何處こゝあそこあなたは事物場所方向を示してゐるもので、これを指示代名詞といふ。代名詞を表示すると左の通りである。

人代名詞

自	對	他	不	定	稱
稱(第一人稱)	稱(第二人稱)	稱(第三人稱)			
(文) われ	(文) なれ	(文) かれ	(文) たれ	(文) だれ	
(口) わたし	(口) おまへ	(口) あれ	(口) なにがし	(口) どなた	
予	汝				
僕	君				
私	貴君				
拙者					

わらは(女)

御許(女)

指示代名詞

種類	近		中		遠		不定	
	稱	類	稱	類	稱	類	稱	類
事物	これ	(文)	これ	(口)	あれ	(文)	いづれ	(文)
	これ	(口)	それ	(文)	あれ	(口)	なに	(口)
場所	ここ		そこ		あそこ		いづく	
	ここ		そこ		あそこ		いづく	
方向	こちら		そちら		あち		いづかた	
	あなた		あなた		あなた		どちら	

練習三

練習

- 一、次の文中の代名詞を指摘し、その種類及び稱を答へよ。
- (イ) それは餘りな御言葉です。私も日本男子です。何で命を惜しみませう。
 - (ロ) 農夫はあの山のこなたを通つて、あの川のあちらに行つた。
 - (ハ) 君はそれとこれとどつちが好きか。どれでも君の好きな方を上げよう。
 - (ニ) こゝは南門の跡、そこは金堂の跡、かしこは法華堂の跡、見まはせばいづこも懐舊の種ならぬはなし。
 - (ホ) あそこにある本は君のではないか。いゝや、あれは僕のではない。あれは多分大西君のだらう。
 - (ヘ) とんぼつりげふはどこまで行つたやら。
 - (ト) 手前どもはこれでもどれでも結構です。
 - (チ) 竹村がくれ夕餉たく煙ぞ靡くこゝかしこ。

二、代名詞の定義を下せ。

第五章 動詞

動詞

一 本を讀み、又字を習ふ。
 二 胡蝶三つ二つ、遠く去りまた近く來る。
 三 朝早く起きる。(口)
 四 あそこに大きな家がある。(口)

右の例で、讀み、習ふ、去り、來る、起きるは事物の動作を、あるは存在を表してゐる。かやうに事物の動作や存在をあらはす語を動詞といふ。

練習四

練習

- 一、左の文中の動詞を摘出せよ。
 (イ) 一もと柳の垂れたるかげに床几ならべて團子を賣る。腰かけて煙ふく

- 客あり。
 (ロ) 蠶は絲を吐き、蜂は蜜を作る。
 (ハ) 風が吹く、花が散る、蝶々のやうに花が舞ふ。
 (ニ) 梅が枝に飛ぶ、黄鳥や池の面に眠る、鷗の姿は泰平の瑞相として人に愛でられる。
 (ホ) 春は花咲き、夏は茂り、秋は實り、冬は眠る。
- 二、動詞の定義を下せ。

第六章 形容詞

- 一 梅檀は二葉より芳し。
 二 松青く砂白し。
 三 彼處に高い山が聳え、こゝに長い川が流れてゐる。(口)
 四 夏は暑く、冬は寒い。(口)

形容詞

練習五

右の例で傍線の引いてある語は事物の性質若くはありさまをあらばしてゐる。かやうに事物の性質若くはありさまをあらはす語で、言ひ切る時の形の終が、文語ならばし、口語ならばいとなるものを形容詞といふ。

練習

一、左の文中の形容詞を指摘せよ。

- (イ) 義は泰山よりも重く、命は鴻毛よりも輕し。
- (ロ) 果物ほど味ひの高く、清きものはあらじ。
- (ハ) 枇杷はうまけれど、種子大きく肉少きは飽かぬ心地す。
- (ニ) 低き家狭き町、淋しき松、暖丈高き稻の穂、鼻の先に並びたる連山をさなき頃より見なれたる一軒家、皆莞爾として我を迎ふるが如し。
- (ホ) 橋はあれど、徒渡りせんいさゝ川いさごも清し、水もさやけし。

A
B
C

bd
e
f

- 一 潮次第に満ち、水さかしまに流る。
- 岸の柳の葉は枯れて、ほろく〜とこぼれる。(ロ)

第七章 副 詞

- (ヘ) 賤しい人にも貴い行がある。
- (ト) 三度たく飯さへこはしやはらかし心のまゝにならぬ世の中。
- (チ) 淋しい秋の雨もあれば、寒い風を伴ふ冬の雨もあり、又鬱陶しい五月雨もある。
- (リ) 暗い寒い冬から明るい暖い春に移り變る。
- (ヌ) 櫻の花は空青く水清い日本の風土に最もよく釣合つて、深山都市どこにあつても皆よろしい。

副詞

二 風甚だ寒し。

この川の流は大層早い。(口)

右の例の中で(一)の次第には動詞満ちさかしまには動詞流るほろほろとは動詞こぼれるを修飾し(二)の甚だは形容詞寒し大層は形容詞早いを修飾する。かやうな語を副詞といふ。

三 彼はいと速に走る。

やゝ暫く考へ居たり。

右の例の中でいとは副詞速ににやゝは副詞暫くに添うてそれぞれその意義を限定してゐる。かやうに副詞は又他の副詞にも添ふことがある。

副詞は動詞形容詞或は他の副詞に添うてその意義を限定する語である。

練習六

練習

一次の文中の副詞を指摘し且つその副詞がいつれの語を限定してゐるかを説明せよ。

(イ) いよ ^{降りしける} 雨に水はます ^{増加せり}

(ロ) 夜も最早明けたるにや ^{人聲} かすかに耳に入る。

(ハ) 今朝は雲霧なごりなく晴れて海山はる ^{と見渡さる}

(ニ) 春もやゝ景色と ^ふ のふ月と梅

(ホ) かれは最も ^{はじめ} に仕事を勉む。

(ヘ) 決して再び失敗しないやうに ^{特に} 注意せねばならぬ。

(ト) 春風緩かに来りて ^{奉納} の旗をひら ^{と吹く}

(チ) 汽車の窓より見れば朝日花やかにさし上る。いと心地よし。

(リ) 白い雲がとき ^く ぼつちり浮んでは又 ^一 たまりもなく吹流される。

(ヌ) 野にはもう菜の花の黄もすがれて却つて白い菜の花がいつまでも咲残

つてゐる。

(ル) 雲をりく人をやすむる月見かな。

(ヲ) ほろくくと山吹散るか瀧の音。

(ワ) この問題は大抵解つた。

二、次の副詞を用ひて短い文を作れ。

(イ) 多分。 (ロ) 殊に。 (ハ) 何卒。 (ホ) 専ら。

三、次の文の動詞形容詞の上に適當な副詞を補へ。

風が 強い。 花が 咲いた。

山 けはし。 雨 降る。

四、副詞の定義を下せ。

第八章 接 續 詞

接續詞

練習七

一 國語英語及び數學の三科を學ぶ。
 二 文を學び且つ武を習ふ。
 三 今日は風は吹くだらう。 しかし雨は降るまい。(ロ)
 右の例で及び且つしかしは上下の語句文章を接續するため
 用ひられる。かゝる語を接續詞といふ。

練習

一、次の文中の接續詞を指摘せよ。

(イ) いま少し遠くに行つて見ようか。併し吾が脚では五町とは走れぬ。

(ロ) 富士は水彩もて作れる畫の如く、窓の右に立ち又左にあらはる。

(ハ) 霞か雲かはた雪か。

(ニ) 諸車の通行を禁ず。但し郵便車はこの限にあらす。

(ホ) 飲食を節せよ。然らざれば健康に害あり。

- (ヘ) 明朝或は明晩はお尋ねいたさうと思つてゐます。もつとも雨天でしたら失禮いたすかも知れません。
 - (ト) 僕は今日山登りをしようと思つてゐた。ところが急に雨が降り出したのでやめにした。
 - (チ) 今日雨が降つた。だから音楽會は人がすくなかつた。
- 二次の接續詞を用ひて文を作れ。
- 但し。 然れども。 はた。 ところが。 或は。
- 三次の — のところに適當な接續詞を入れよ。
- (イ) 私は随分盡力した。 — 結果は不成功であつた。
 - (ロ) 彼は學力が優秀で、 — 品行が方正です。 — 惜しいことに身體が強健ではありません。
 - (ハ) 秋は來りぬ。 — 暑氣未だ退かず。
- 四、接續詞の定義を下せ。

第九章 感 動 詞

感動詞

練習八

- 一 あゝ哀しい哉。
 - 二 いざや歌はん諸共に。
 - 三 あはれ太閤世を去りて、よつぎの主は幼し。
 - 四 さてくゝ残念なことをしました。(口)
 - 五 おやくゝたいへんなことになりました。(口)
- 右の例で傍線の引いてある語はいづれも感動した時に發する語である。かゝる語を感動詞といふ。
- 練習
- 一、左の文中にある感動詞を摘出せよ。
- (イ) 松島やあゝ松島や松島や。

- (ロ) いで大船を乗出して、我は拾はん海の富。
- (ハ) あはれ今年の秋も往ぬめり。
- (ニ) おやまた忘れた。こんなに忘れてまあどうしよう。
- (ホ) まあ、何といふ明るい快い感じを持つた社殿だらう。
- (ヘ) あはれ楽しき今日の日をいざ諸共に祝はなん。
- (ト) あら風が吹いて来た。
- (チ) え、口惜しい。

第十章 助動詞

- 一 よく勉強、又よく遊ぶべし。
- 二 明日は雨降らむ。
- 三 枝々星を帯びたり。

助動詞

四 僕は朝早く学校に出かけて往つた。(ロ)
 右の例で、べし、むたり、及びたは何れも動詞に添うて其の意義を助けてゐる。かゝる語を助動詞といふ。

- 一 東京は我が國の首都たり。
- 二 級中第一の勉強家は彼なり。
- 三 四と五との積は二十なり。
- 四 花の美しきなり。

右のやうに助動詞には名詞・代名詞・數詞・形容詞に添ふものもある。

- 一 大いに勉強せざるべからず。
 - 二 人を信ぜしめんと欲せば先づ自ら信ぜよ。
- 右のやうに助動詞は又他の助動詞に添ふことがある。

練習九

練習

一、左の文中から助動詞を摘出せよ。

- (イ) 己に恥ぢざる工夫をなすべし。
- (ロ) 遭難地に急行せしめたり。
- (ハ) 手折らるる人にかをるや梅の花。
- (ニ) 十五夜に影を見せざりし月は今宵てり出でぬ。
- (ホ) 心なき身にも感などか起らざらん。
- (ヘ) 軍人は國家の干城たり。
- (ト) 彼の人は既に東京に行かれしなるべし。
- (チ) 歲月は流るることし。分陰ををしみて勉強せざるべからず。
- (リ) 見られずといへども罪は罪なり。
- (ヌ) 人に車を押させる。

- (ル) 雨は降るだらう、しかし風は吹くまい。
- 二、次の文を口語文になほせ。
- (イ) 賞品を授けられたり。
- (ロ) 文字を習はしむ。
- (ハ) 夜の更けぬ間にこの書を読み終へむ。

三、助動詞の定義を下せ。

第十一章 助詞

- 一 花を嵐山に見る。
- 二 人にして鳥にだに如かず。
- 三 彼は年なほ若けれども力強し。
- 四 行ける所まで行かう。(口)

助詞

五 讀まれるだけ讀め。(ロ)
右の例のをににしてにだにはどもまでだけは種々の語についてその語に意義を添へ、又は他の語との關係をあらはしてゐる。かゝる語を助詞といふ。

助詞には種類が甚だ多い。今左に主なものを擧げよう。

一、名詞・數詞・代名詞につゞく助詞

のがとをにへからよりまで。

二、動詞・形容詞・助動詞につゞく助詞

ばともどもにもをがてでつゝながら。

三、種々の品詞につゞく助詞

はもぞなんやかこそばかりのみだにすらさへ。

練習一〇

練習

一、左の文中の助詞を摘出せよ。

- (イ) 花ありやなしや。
- (ロ) みがかずば玉も鏡も何かせんまなびの道もかくこそありけれ。
- (ハ) 語るなと一人に言へばまた一人語るななどと語る世の中。
- (ニ) 暑くつてもしばらく辛抱しろ。
- (ホ) 用意は整うたのに、會はまだ始まらない。
- (ヘ) 勉強さへすれば、どんな事でも出来る。
- (ト) 君は神戸から倫敦へ行く航路を知つてゐるか。
- (チ) 千丈の堤も蟻の穴から崩れる。

以上説いた中で、名詞・數詞・代名詞を體言といひ、動詞・形容詞を用言といふ。

練習一一

練習

體言・用言

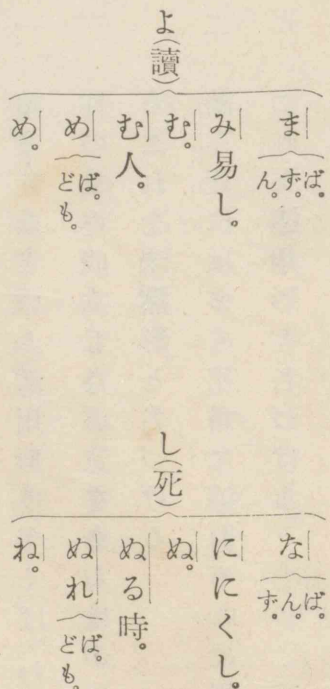
左の文章を品詞に分類せよ。

- (イ) 天は清く晴れたれども、脚下は薄黒き雲の波、一面にはびこれり。その雲綿の如し。見るく、東の方ばつとあかく、紫となり、薄紅となり、遂に深紅色となる。
- (ロ) 山鳥の羽音、囀る聲風の戦ぐ、鳴る嘯く、聲叢の蔭、林の奥にすだく、蟲の音空車荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響蹄で、落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か。
- (ハ) 鳴く蟲の音を踏み分け行けば、蛙とび、蝻あひくとび、稀には蟹がさくと隠れ行く。
- (ニ) それとなく郷里のことなど語り出でて、秋の夜に焼く餅のほひかな。
- (ホ) 菊の香や奈良には古き佛たち。
- (ヘ) 鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな。

單語篇(下)

第一章 文語動詞の活用

一 文語動詞の活用形



動詞は右の如く變化しない部分と變化する部分とを有する。その變化しない部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といひ、

語幹
語尾
(語根ともいふ)

文語動詞の活用

活用形

その變化することを活用といひ、その變化する各の語形を活用形といふ。

未然形

一、讀ま死なといふ活用形は多く「ば」「む」「ず」などに連つて、動作のまだ成立しない意をあらはすに用ひる形であるからこれを未然形と名づける。

連用形

二、讀み死には多く用言に連ねる時に用ひる形であるから、これを連用形と名づける。
なほこの形は動作のつゞいて起る時に前の動作をいひさす形となる。

書を讀み字を習ふ。

又、いひすゑて名詞となすこともある。

本の讀みを習ふ。

終止形

三、讀む死ぬは多く文を終止するに用ひる形であるから、これを終止形と名づける。なほこの形が動詞の本體である。

連體形

四、讀む死ぬるは多く名詞・數詞・代名詞即ち體言に連ねる時に用ひる形であるから、これを連體形と名づける。

已然形

五、讀め死ぬれは多く「ば」「ど」「ども」などに連つて、動作の已に成立した意をあらはすに用ひる形であるから、これを已然形と名づける。

命令形

六、讀め死ぬは命令の意をあらはすに用ひる形であるから、これを命令形と名づける。

文語動詞の活用の種類
四段活用

(一) 四段活用

二 文語動詞の活用の種類

動詞の語尾が左の例のやうに五十音圖のアイウエの四段に互つて變化するものを四段活用といふ。この活用に屬する動詞はカ・サ・タ・ハ・マ・ラの六行に存して、動詞の中でその數が最も多い。

習 ^{ナラ}	立 ^タ	書 ^カ	語尾	
			幹	尾
は	た	か	未	然
ひ	ち	き	連	用
ふ	つ	く	終	止
ふ	つ	く	連	體
へ	て	け	已	然
へ	て	け	命	令

上二段活用

(二) 上二段活用

動詞の語尾が左の例のやうに五十音圖のイウの二段に互つて變化し、且つウ段に^レれが添うて活用するものを上二段活用と

かば
かぞへ
かよ

いふ。この活用に屬する動詞はカ・タ・ハ・マ・ヤ・ラの六行に存してゐる。

老 ^オ	生 ^オ	盡 ^ツ	語尾	
			幹	尾
い	ひ	き	未	然
い	ひ	き	連	用
ゆ	ふ	く	終	止
ゆる	ふる	くる	連	體
ゆれ	ふれ	くれ	已	然
いよ	ひよ	きよ	命	令

上一段活用

(三) 上一段活用

動詞の語尾が左の例のやうに五十音圖のイ段にだけ活用し、且つこれに^レれが添うて活用するものを上一段活用といふ。この活用に屬する動詞はア・カ・ナ・ハ・マ・ワの六行に存してゐる。

下二段活用

(四) 下二段活用

動詞の語尾が左の例のやうに、五十音圖のウエの二段に互つて變化し、且つウ段にれが添うて活用するものを下二段活用といふ。この活用に屬する動詞は五十音圖の各行に互つて存し、その數の多いことは四段活用の次に位してゐる。

語尾	語幹	(射)	(著)	(似)
未然	い	き	に	
連用	い	き	に	
終止	いる	きる	にる	
連體	いる	きる	にる	
已然	いれ	きれ	にれ	
命令	いよ	きよ	によ	

かき
て
け
こ

下一段活用

(五) 下一段活用

動詞の語尾が左の例のやうに、五十音圖のエ段にだけ活用し、且つこれにるれが添うて活用するものを下一段活用といふ。この活用に屬する動詞は「蹴る」の一語あるだけである。

語尾	語幹	受	兼	植
未然	け	ね	え	け
連用	け	ね	え	け
終止	く	ぬ	う	ける
連體	くる	ぬる	うる	ける
已然	くれ	ぬれ	うれ	けれ
命令	けよ	ねよ	えよ	けよ

正格活用

カ行變格活用

以上五種の活用を正格活用といふ。

(六) カ行變格活用

動詞の語尾が左の例のやうに、五十音圖のイ・ウ・オの三段に互つて活用し、且つウ段に^レが添うて活用するものは、たと^レ「來」の一語あるだけである。これをカ行變格活用といふ。

語幹	語尾
(來)	未然
こ	連用
き	終止
く	連體
くる	已然
くれ	命令
こよ	

サ行變格活用

カキムケシ

(七) サ行變格活用

動詞の語尾が左の例のやうに、五十音圖のイ・ウ・エの三段に互つて活用し、且つウ段に^レが添うて活用するものは、たと^レ「爲」の一語あるだけである。これをサ行變格活用といふ。

カキムケシ

語幹	語尾
(爲)	未然
せ	連用
し	終止
する	連體
すれ	已然
せよ	命令

但し、^ズは他語と熟合してサ行變格活用の動詞を作る。

罪^ツす。 旅^{タビ}す。 ものす。 運動^{ウツク}す。 辱^{ウチ}くす。
 審^シかにす。 講^{コウ}ず。 論^{ロン}ず。 等。

(八) ナ行變格活用

動詞の語尾が左の例のやうに、五十音圖のア・イ・ウ・エの四段に互つて變化し、且つウ段に^レが添うて活用するものは、たと^レ「死ぬ」^{シヌ}「往ぬ」の二語あるだけである。これをナ行變格活用といふ。

ナ行變格活用

ナ 23
ニ 345
ヌ 16
ネ 1

ラ行變格活用

リ 23
リ 4
ル 156
レ 1
ロ

(九) ラ行變格活用

動詞の語尾が左の例のやうに、五十音圖のアイウエの四段に互つて活用することは、四段活用のやうであるけれども、イ段で言ひ切るものは、たと「有り」「居り」「侍り」の三語あるだけである。これをラ行變格活用といふ。

死 ^シ	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
な							
に							
ぬ							
ぬる							
ぬれ							
ね							

有 ^ウ	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ら							
り							
り							
る							
れ							
れ							

猶、高^カかり^カ美^ミし^シかり^カのやうに、形容詞高^{タカク}美^{美しく}しくにこの動詞あり

形容動詞

がつゞいて約められたものや、明瞭^{アカラシク}なり^{ナリ}平然^{ヘイゼン}たり^{ナリ}のやうに、副詞明瞭^{アカラシク}に^ニ平然^{ヘイゼン}と^トに同じく動詞ありがつゞいて約められたものもラ行變格活用である。これらを一括して形容動詞とも呼んでゐる。

口語では、かり^カたり^カの活用形は消滅し、なり^{ナリ}の活用は左圖の如く變化した。

静 ^{シヅカ}	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	假定
か						
だ						
だ						
だ						
な						
なら						

以上四種の活用を變格活用といふ。

三 動詞活用の識別法

以上述べた正格變格九種の活用の中、左の六種に屬する動詞は、

變格活用

動詞活用の識別法

その数が極めて少いからこれは皆諳記しておかねばならぬ。

上一段活用 射る 鑄る 著る 煮る 似る 干る

見る (顧みる、鑑みる、
惟みる、試みる) 居る 率ゐる

下一段活用 蹴る

カ行變格活用 來

サ行變格活用 爲

(この外、信ず
勉強すの類)

ナ行變格活用 死ぬ 往ぬ

ラ行變格活用 有り 居り 侍り

○四段上二段下二段の三活用に屬する動詞は、その数が甚だ多いけれども、左の識別法によつてこれを知ることが出来る。

一、「讀まず」「書かず」のやうに打消のずがア段の音につゞくものは四段活用である。

動詞の語尾の假名遣

ア行

(得)

えう うれ

(下二段活用)

(射) (鑄)

いいる いれ

(上一段活用)

ワ行

ワ行活用では

植 飢 据

ゑう うれ

(下二段活用)

(居) 率

み ゐる ゐれ

(上一段活用)

二、「落ちず」「悔いず」のやうに打消のずがイ段の音につゞくものは上二段活用である。

三、「榮えず」「兼ねず」のやうに打消のずがエ段の音につゞくものは下二段活用である。

なほ動詞の語尾の假名の紛れ易いものは、ア行・ハ行・ヤ行・ウ行である。これらは大體左のやうに心得ておくべきである。

ヤ行

ヤ行活用では

老 悔 報 い ゆ ゆる ゆれ

(上二段活用)

甘 ゆ 嘶 ゆ 癒 ゆ 覺 ゆ

聞 ゆ おもほゆ 消 ゆ 凍 ゆ 越 ゆ

榮 ゆ 冴 ゆ 戯 ゆ(そばふトモ) 聳 ゆ

え ゆ ゆる ゆれ

絶 ゆ 費 ゆ 潰 ゆ 痿 ゆ 生 ゆ

(下二段活用)

映 ゆ 冷 ゆ 殖 ゆ 吠 ゆ まみゆ

見 ゆ 悶 ゆ 燃 ゆ 萌 ゆ

以上の外はすべてハ行の活用である。

ザ行、タ行の假名も紛れることがあるけれども、ザ行活用は左の一語だけである。

タザ ハ
行行 行

混 ゼ ず ずる ずれ (下二段活用)

この外に講ず、變ず等のやうに、サ行變格に活用するものがある。其の他はすべてタ行活用である。

練習二

練習

一、左の文中の動詞の活用の種類及び活用形の名を答へよ。

(イ) 徐ろに熟慮して速かに行へ。

(ロ) 不自由を常と思へば不足なし。心に望おこらば、困窮したる時を思ひ出すべし。

(ハ) 大空に聳えて見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり。

(ニ) 常に良き著述に親しむ者は只獨り居れども寂しきことを覺えず。

二、左の動詞を活用によつて類別し、その六つの活用形を表

示せよ

強ふ。老ゆ。立身す。煮る。居り。居る。死ぬ。死す。植う。用ふ。任す。任す。朽つ。信ず。撫づ。碎く。解く。怖づ。聳ゆ。堪ふ。

三、左の文中の動詞の活用に誤があれば正せ。

- (イ) 彼の勤勉誠に感づるに餘りあり。
- (ロ) 汝に出づものは汝にかへる。
- (ハ) 人如何に笑うとも自ら守る所堅く、行道に違わずば、何の恥する事かこれあらん。
- (ニ) 困難に堪えうる人は、年老ひて憂なからん。
- (ホ) 鷹は飢ゆとも穂はつまず。
- (ヘ) 老いて後、悔ゆこと勿れ。
- (ト) 才學なくば身を立つこと能はず。
- (チ) 月霜の如く冴へ、風海の如く吼ふる夜は、人籟すべて絶へて、直に至上の聲を聞く心地す。
- (リ) 與ふは受くよりも幸なり。
- (ヌ) 教ゆるは學ぶの半ばなり。

口語動詞の活用形

- (ル) 榮ふる大御代祝えや祝え。
- (フ) 式終りて一同校庭の北隅に記念樹を植ゆ。

第二章 口語動詞の活用

一 口語動詞の活用形

よ(讀)

ま	う。		
み	始	め	る。
む	時		
め	ば。		
め	。		

お(落)

ち	よ	う。	(未然形)	
ち	始	め	る。	(連用形)
ち	る。		(終止形)	
ち	る	時		(連體形)
ち	れ	ば。		(假定形)
ち	よ	。	(命令形)	

右の例のやうに、口語動詞も亦文語動詞と同じく六段に活用する。只文語とちがつてゐるのは、文語では未然形に「ば」が添うて

假定の意味をあらはし、已然形に「ば」が添うて確定の意味をあらはすが、口語では文語動詞の已然形に當るところは、すべて假定の條件を示す意味となる點である。それ故に口語ではこの形を假定形と名づける。

二 口語動詞の活用の種類

四段活用

(一) 四段活用

口	文	口	文	活用 語幹/語尾
四段	ラ變	四段	四段	
有		書		未然
ら	ら	か	か	連用
り	り	き	き	終止
る	り	く	く	連體
る	る	く	く	已然(文) 假定(口)
れ	れ	け	け	命令
れ	れ	け	け	

本あり—本がある

上一段活用



右の表のやうに、口語では文語のナ變「う」變とともに四段活用となる。

(二) 上一段活用

口	文	口	文	活用 語幹/語尾
上一	上一	上一	上一	
起		(見)		未然
き	き	み	み	連用
き	き	み	み	終止
き	く	みる	みる	連體
き	くる	みる	みる	已然(文) 假定(口)
き	くれ	みれ	みれ	命令
き	きよ	みよ	みよ	

早く起く—早く起
きる
早く起くる人—早
く起くる人
早く起くれば—早
く起されば

右の表のやうに、文語の上二段上一段は口語では共に上一段活

下一段活用

用となる。
(三) 下一段活用

口	文	口	文	活用	語幹/語尾
下	下	下	(蹴)	未然	
一	二	受		連用	
		け	け	け	け
		け	け	ける	ける
		ける	く	ける	ける
		ける	くる	ける	ける
		ける	くれ	けれ	けれ
		ける	けよ	けよ	けよ
		けよ		命令	

恩を受く 恩を受
ける
恩を受くる人 恩
を受け人
恩を受ければ 恩
を受ければ

カ変

右の表のやうに、文語の下二段下一段は口語では共に下一段活
用となる。
(四) 力行變格活用

口	文	活用	語幹/語尾
カ	變	未然	
(來)		連用	
こ	こ	終止	
き	き	連體	
くる	く	假然(文)	
くる	くる	假然(口)	
くれ	くれ	命令	
こい	こよ		

人 人がくる
早くこよ 早くこ
い

右の表のやうに、口語では終止形及び命令形に文語と異なる點
がある。

(五) サ行變格活用

口	文	活用	語幹/語尾
サ	變	未然	
(爲)		連用	
せ	せ	終止	
し	し	連體	
する	す	假然(文)	
する	する	假然(口)	
すれ	すれ	命令	
しろ	せよ		

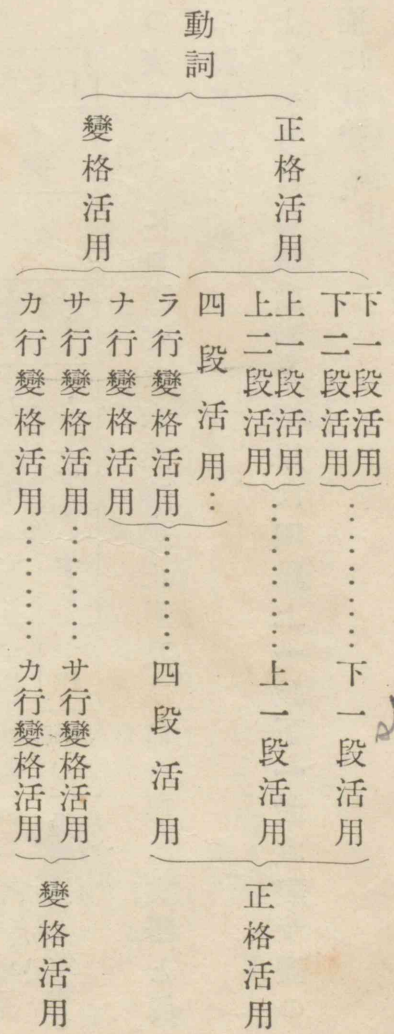
勉強をせず 勉強
を
せぬ
勉強をす 勉強を
しない

右の表のやうに、口語では未然形終止形及び命令形に文語と異
なる點がある。
以上のやうに口語動詞の活用は四段上一段下一段力變サ變の
五種に減ずる。
左に文語・口語兩活用の種類を述べよう。

サ變

文 語

語



三 口語動詞活用の識別法

○語數の少ないもの。

カ行變格活用 來る

サ行變格活用 爲る (この外、勉強する、論ずるの類)

○四段上一段下一段の三活用に屬する動詞は、その數が多いけ

練習一三

練習

れども、左の見分法によつてこれを知ることが出来る。

一、「讀まぬ(ない)」「死なぬ(ない)のやうに打消のぬ(ない)がア段の音につゞくものは四段活用である。

一、「落ちぬ(ない)」「みぬ(ない)のやうに打消のぬ(ない)がイ段の音につゞくものは上一段活用である。

一、「受けぬ(ない)」「飢ゑぬ(ない)のやうに打消のぬ(ない)がエ段の音につゞくものは下一段活用である。

一次の文中の動詞の活用及び活用形を問ふ。

- (イ) 最後に出る者が戸を締める。
- (ロ) しようと決心すればきつと出来る。
- (ハ) 猿も木から落ちることがある。

- (ニ) 怨に報いるに徳を以てするといふこともある。
- (ホ) 恥ぢることを知らないものは自ら身を辱めるものである。
- (ヘ) 右を立てれば左が立たぬ。両方立てれば身が立たぬ。
- (ト) 世の學問に志す者は、とかく低いところを経ないで、すぐに高い所へ登らうとする弊がある。それでは低いところにさへ達することも出来ない。
- (チ) 湯を浴びた猫は水を恐れる。
- (リ) 猫が肥えれば鯉節が痩せる。
- (ヌ) 棄てる神があれば助ける神がある。
- (ル) 打つも撫でるも親の恩。

二次の口語動詞を活用させて六つの語形を作れ。

- 吠える。 朽ちる。 飢ゑる。 閉ぢる。 老いる。 留める。 死ぬ。
- 垂れる。 信ずる。 榮える。

第三章 形容詞の活用

形容詞にも活用がある。けれどもその活用は五十音圖の同一行の間に行はれるのでなくて、**カ行・サ行**の兩行に跨つて活用するものである。そしてその活用に**ク活用**と**シク活用**との二種類がある。

一 文語形容詞の作用

「清し」

- 一 水清くば大魚すまじ。
水清くとも大魚すまむ。
- 二 水清く流る。
- 三 水清し。

「美し」

- 花美しくば香も亦よからむ。
花美しくとも毒あらむ。
- 花美しく咲く。
この花甚だ美し。

(未然形)

(連用形)

(終止形)

四 水清き池あり。

美しき花咲けり。 (連體形)

五

水清ければ大魚すまず。

この花美しければ君に與へむ。 (已然形)

水清けれども大魚すむ。

この花美しけれども毒あり。

形容詞の活用には命令形がない。

右の「清し」のやうに活用するものをク活用の形容詞といひ、「美し」のやうに活用するものをシク活用の形容詞といふ。今これを表示すると左の通りである。

文語形容詞活用表

文語形容詞活用表

活用	語幹	語尾	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ク活用	清		ク	ク	シ	キ	ケレ
シク活用	美		シク	シク	シ	キ	シケレ

連用形は左の例のやうに副詞に轉ずる語形であるから、又副詞

口語形容詞の活用

形ともいふ。

早く起き、遅く寝ぬ。

二 口語形容詞の活用

く立つ

しく咲く (連用)

い波

しい (終止)

い波

しい花 (連體)

ければ

しければ (假定)

右の例のやうに、口語形容詞にもク活用とシク活用とがある。これを表示すると左の通りである。

口	文	活用	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然(文)	假定(口)
ク活用	清				○	○	い	い	け	れ
					○	○	い	い	け	れ

口 文	
シク活用	
美	
○	しく
しく	しく
し。い。	し。
し。い。	しき。
しけれ	しけれ

「シク」活用の終止形に「イ」を加へるのは口語形容詞の特色である。
又「ケレ」の形は口語では假定の條件を示す意味となるから、假定形と名づける。

練習一四

練習

- 一、左の文中の形容詞を摘出し、且つその活用形を説明せよ。
- (イ) 手のわるき人の憚らず文書き散らすはよし。見苦しとて人に書かすはうるさし。
 - (ロ) 森戸の川を渡るに、一岬、松深く風情優しき所、こゝに明神の祠あり。岩礁漸く繁し。

- (ハ) 雨も好し、露も好し、霰も天より降るもの面白からぬは無きが中に、雪は特にめでたし。
- (ニ) 朝夕は凌ぎ易けれど、日中は堪へ難し。
- (ホ) 遠き慮なければ必ず近き憂あり。
- (ヘ) 大原女の打連れて来るも懐かしきに、下行く水の心地よき響を聞かせたるなど、見るもの聞くものすべて昔ゆかしきあたりなり。
- (ト) 両方の手平を高く立てて、雪の如き真白い腹を出して、碧い海に一文字。
- (チ) 色は美しいが味は辛くて、香もわるい。
- (リ) どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない日和を花曇といふ。夜は照りもせず曇りもはてぬ朧月夜雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。
- (ヌ) 石が大きければ、水煙も夥しい。
- (ル) ひもじい時にまづいものはなご。

(ヲ) わるいことはせぬがよろしうございます。
 二、左の形容詞を活用させて、その五つの語形を表に作れ。
 痛し。羨し。勇し。著し。辛し。見にくし。尊し。

第四章 音 便

動詞の音便

イ音便

動詞の連用形からてたりたに連なる時、その語尾が発音の便宜上、他の音に轉ずることがある。これを動詞の音便といひ、その文字をも書き改めねばならぬ。動詞の音便には左の四種がある。

動詞の音便

一、イ音便 きぎのい に轉ずるもの。

説きい。て (文語) (口語)
 説きいた (口語)
 説きいたり (口語)
 泳ぎい。て (文語) (口語)
 泳ぎいだ (口語)
 泳ぎいだり (口語)

二、ウ音便 ひのうに轉ずるもの。

買ひう。て (文語) (口語)
 買ひうた (口語)
 買ひうたり (口語)

三、撥音便 にびみの撥音んに轉ずるもの。

死にん。で (文語) (口語)
 死にんだ (口語)
 死にんだり (口語)
 學びん。で (文語) (口語)
 學びんだ (口語)
 學びんだり (口語)

撥音便

ウ音便

促音便

飲み。 飲んで (文語) (口語)
 飲んだ (口語)
 飲んだり (口語)

四、促音便 ちひりの、促音つに轉ずるもの。

勝ち。 勝つて (文語) (口語)
 勝つた (口語)
 勝つたり (口語)

買ひ。 買って (文語) (口語)
 買った (口語)
 買った (口語)

釣り。 釣つて (文語) (口語)
 釣つた (口語)
 釣つたり (口語)

形容詞の音便

イ音便

形容詞の音便

一、イ音便 きのいに轉ずるもの。

ウ音便

善き哉。 善い哉 (文語)
 美しい花。 美しい花 (文語)

二、ウ音便 くのうに轉ずるもの。
 暑くなる。 暑くなる (文語)
 深くて。 深くて (文語)

○又、形容詞の連用形から轉じた副詞が、サ行變格の「す」と合して熟語の動詞となる時に、その語尾のくがウ音便を起すことがある。

ウ音便 全くす。 全うす (文語)

練習

一次の文中の動詞形容詞の音便を指摘してその原音を示せ。

練習一五

(イ) 休暇中に舊師を訪うて小學校時代を偲ぶ。

(ロ) その程々に従つて祈らぬ神佛もなく立てぬ願もなし。

(ハ) 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る。

(ニ) 柿食うて洪水の詩を草しけり。

(ホ) 親子三人が庭にするた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。後には麥の

束が山と積んである。それをてんで一束づつ取つては兩手で根本の

所をつかんで打臺にばたくとたきつけると、莖の先についてゐる穂

が、しいてある筈の上に面白いやうにとび散る。

(ヘ) 何處かで逢うたことのあるやうな人だ。

二、左の文の誤を正し、且つその理由を述べよ。

(イ) 飛むで火に入る夏の蟲。

(ロ) 養ふた上に敬ふことが大事だ。

(ハ) 思ふて居るばかりでは埒があかぬ。言ふて見よ。

(ニ) 苦しひことも、恥づかしひこともすべて堪へ忍むで、仕事にあたらうと思

ふ。

(ホ) 草花など作つて餘生を樂しむで居ります。

(ヘ) 今よりはよく行を慎むでかゝる過は再びすまじと誓ふたり。

(ト) 首尾よふ卒業せられておめでたふございます。

(チ) 林檎食ふて牡丹の前に死なん哉。

(リ) 負ふた子に髪なぶらるる暑さ哉。

(ヌ) 轉むでも笑ふてばかり難かな。

(ル) 翼くは仰ひで天に恥ぢざれ。

(ヲ) 任重ふして負荷に堪へず。

(ワ) 來臨を辱ふす。

(カ) 大いに意を強ふするに足る。

文語助動詞の種類及活用

第五章 文語助動詞の種類及活用 (別表参照)

受身

一 受身の助動詞

- 一 犬人に打たる。
- 二 犬人に蹴らる。

右のるらるは他から動作を受ける意をあらはすもので、これを受身の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	る	る	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

(下二段活用に同じ)

可能

二 可能の助動詞

- 一 一日に十里の道を行かる。

- 二 六尺の堀も飛び越えらる。
 - 三 腰間の秋水鐵をも斷つべし。
 - 四 その勢あたるべからず。
- 右のるらるべしべからはその動作を成し得る意をあらはすもので、これを可能の助動詞といふ。右の中、るらるの活用は受身の助動詞と同じであるが命令形がない。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
べかり	べから	べかり	(べかり)	(べかる)	(べかれ)	○

(形容詞に同じ)

括弧内のは現代文では殆ど用ひられない。

●可能の助動詞るらるは又轉じて動作が自然に起つて止められない意をあらはすことがある。これを自然的可能といふ。

自然的可能

使役

亡き友の事のみ思はる。
たゞ夢とのみ考へらる。

三 使役の助動詞

- 一 生徒に字を書かす。
- 二 大工に家を建てさす。
- 三 下男に田を耕さしむ。

右のす・さす・しむはあるものが他のものに動作を行はせる意をあらはすもので之を使役の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

(下二段活用
に同じ)

崇敬

四 崇敬の助動詞

- 一 父は謠曲を好まる。
- 二 校長は毎年上京せらる。
- 三 主上都を出て立たす。
- 四 御元服も院にてせさす。
- 五 おほやけにも屢行幸せしめ給ふ。
- 六 殿下式場に臨ませらる。
- 七 侍臣を差遣せさせらる。
- 八 皇太子御位に即かしめらる。
- 九 攝政宮殿下北海道に行啓せさせ給ふ。
- 一〇 春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。
- 二 殿下にはいと快げに笑ひたまふ。

時

三 御年五十にあまりましたとぞ聞く。
 右のる。らる。す。さす。しめ。せらる。させらる。しめらる。させ。せ。たまふ。ましますは他の動作を敬ふ意をあらはす助動詞である。

一 謹みて新年を賀したてまつる。
 二 まことそらごと見給へんとて、まうで來つるなり。
 三 いくつといふことも更におぼえ侍らず。
 四 本日出發仕り候。

右のたてまつる。給へ(下二段活用侍ら候は動作を丁寧にいふ助動詞である。
 かやうに他の動作を敬ひ、又は動作を丁寧にいひあらはす時に用ひる助動詞を崇敬の助動詞といふ。

五 時の助動詞

完了

(イ) 完了の助動詞

- 一 書を讀み^つたり。
- 二 書を讀めり。

右のつ。ぬ。たり。りは動作の完了した意をあらはすもので、これを完了の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	ら	り	り	る	れ	〇
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	〇

括弧内ものは現代文では殆ど用ひられない。

(下二段に同じ)
 (ナ變に同じ)
 (ラ變に類す)

過去

(ロ) 過去の助動詞

- 一 花、散りき。
- 二 花、散りけり。

右のきけりは動作の既に過ぎ去つた意をあらはすもので、これを過去の助動詞といふ。その活用は左の通りである。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き	○	○	き	し	しか	○
けり	(けら)	(けり)	けり	ける	けれ	○

(特殊活用)
(ラ變に類する)

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

又きけりは更につぬたりりの連用形に添へて用ひられることがある。但し、現代文にはあまり用ひられない。

- 一 花、散りてき。

未來

(ハ) 未來の助動詞

- 一 明日、空晴れむ(ん)

右のむは動作の未來に起る意をあらはすもので、これを未來の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む	○	○	む	む	め	○

(特殊活用)

又むは更につぬたりりの未然形に添へて用ひられることがある。但し、現代文にはあまり用ひられない。

- 一 花、散りてむ。
- 二 花、散りなむ。
- 三 花、散りたらむ。
- 四 花、散れらむ。

練習一六

練習

左の文中から受身・可能・使役・崇敬・時の助動詞を指摘し、且つその活用をいへ。

推量

六 推量の助動詞

- (イ) 勝海舟若き頃西洋式の兵術を學びしが常に良書の得がたきを歎ぜり。
 - (ロ) 彼は篤志家に救はれ、學資を給せられて、勉學することを得遂に學界の泰斗と仰がるるに至れり。
 - (ハ) 朝は水澄めれば、底の眞砂も數へつべし。
 - (ニ) この兒利根こそ生れつきたため、なほ幼くしてその氣根のほどもはかりがたく、家富めりとも見えねば、黄金のこと心得られず。
 - (ホ) たゞかれて晝の蚊を吐く木魚かな。
 - (ヘ) よくこの語に現れたりといふべし。
- 一 靜心なく花の散るらむ。
 - 二 いつの頃なりけむ、確には覺えず。
 - 三 月出づべし。

四 雨降るらしく思はる。

右のらむけむべしらしくは事物を推量する意をあらはすもので、これを推量の助動詞といふ。

右の外未來の助動詞むも亦推量の助動詞として用ひられることがある。

風吹かむ。

猶現代文では用ひられないけれども、らしめりましと云ふ推量の助動詞がある。

三吉野の山の白雪積るらしふる里寒くなりまさるなり。

立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ。

山里に散りなましかば櫻花匂ふさかりも知られざらまし。

推量の助動詞の活用は左の通りである。

べしは命令にも用ひられる。古文に用ひられたらしには活用がない。

打消

七 打消の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ
らし	らしく	らしく	らし	らしき	らしけれ

(特殊活用)

(形容詞に同じ)

一 花咲かず。

二 予は出席せざりき。

三 君はまだ遠くは行かじ。

四 夜はまだ明くまじ。

右のずざりじまじは打消の意味をあらはすもので、之を打消の助動詞といふ。

指定

八 指定の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○
ざり	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ
じ	○	○	じ	じ	じ	○
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○

(特殊活用)

(ラ變に同じ)

(形容詞の活用と同じ)

- 一 かしこに見ゆるは我が家なり。
 - 二 花の散りくるなり。
 - 三 彼の性質は甚だよろしきなり。
 - 四 君君たり、臣臣たり。
- 右のなりは事物・動作・有様を、たりは事物を指し定める意をあらはすものでこれを指定の助動詞といふ。

咏嘆

九 咏嘆の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

(ラ變に同じ)

- 一 秋の野に人待つ蟲の聲すなり。
 - 二 見渡せば花も紅葉もなかりけり。
- 右のなり、けりは咏嘆の意をあらはすもので、これを咏嘆の助動詞といふ。

一〇 比況の助動詞

- 一 落花、雪の如し。
- 二 歲月流るる(が)如し。

右の如しは比況の意をあらはすもので、これを比況の助動詞と

比況

希望

いふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○

(形容詞に類す)

一 希望の助動詞

一 東京に行きたし。

二 月見に行かまほし。

右のたしまほしは動作を希望する意をあらはすもので、これを希望の助動詞といふ。そのうちまほしは現代文には用ひられない。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ

(形容詞に同じ)

練習一七

練習

一、左の文中から推量・打消指定・咏嘆・比況・希望の助動詞を指摘し、且つ其の活用形をいへ。

- (イ) 苟もこの國に生まれ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰かこの光を仰がざるべき。
- (ロ) かなはじと思ひけむ、太刀を捨てて逃げ失せたり。
- (ハ) 父は父たらずとも、子は子たらざるべからず。
- (ニ) 冬の月は水晶もて作れるものを見るが如し。
- (ホ) 寢覺の枕に通ひ來なり。あなゆかしの鐘の音や。
- (ヘ) 旅行したきは山々なれども、父のゆるし給はぬを如何にかせん。
- (ト) あはれ今年の秋もいぬめり。
- (チ) 吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ。
- (リ) げに持つべきものは子なりけり。
- (ヌ) 男のすなる日記といふものを、女もして見んとてするなり。

口語助動詞

受身

一 受身の助動詞

- 一 犬にかまれる。
- 二 先生にほめられる。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ(ろ)
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ(ろ)

二 可能の助動詞

可能

- 二、 (ル) 人の子たらんものは、重盛がその父に對する如くあらまほしきものなり。
左の助動詞の活用を示せ。
す。き。む。たり(時)けん。さす。如し。たし。

第六章 口語助動詞の種類及活用

使役

三 使役の助動詞

- 一 生徒に字を書かせる。
- 二 大工に家を建てさせる。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ(ろ)
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ(ろ)

四 崇敬の助動詞

崇敬

- 一 父上はよく字を書かれる。

- 一 この本は私にも讀まれる。
- 二 朝五時には起きられる。

可能の助動詞の活用は受身の助動詞と同じであるが、命令形がない。

時 過去

- 二 先生は毎月上京せられる。
活用は受身の助動詞に同じであるが、命令形がない。
- 三 今日は雪が降ります。
このますは動作の主に対する尊敬ではなくて、話の相手に対する敬意を示すものである。

五 時の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ
			まする	まする		ませ

(イ) 過去の助動詞

- 一 昨日雪が降つた。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	たら	たり	た	た	たら	○

未來

(ロ) 未來の助動詞

- 一 明日は雨が降らう。
- 二 次の日曜日に運動をしよう。
◎うよう共に活用せぬ。

六 推量の助動詞

- 一 多分雨が降らう。
- 二 多分空が晴れよう。
- 三 やがて櫻も咲くらしい。

推量

打消

七 打消の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
らしい	○	らしく	らしい	らしい	○	○

指定

八 指定の助動詞

- 一 これは梅の花だ。
- 二 これは梅です。

梅の花が散るのだらう。

まい	ぬ	ない	助動詞
○	○	○	未然
○	○	なく	連用
まい	ぬ(ん)	ない	終止
まい	ぬ(ん)	ない	連體
○	ね	なけれ	假定
○	○	○	命令

- 一 書を読まぬ。
- 二 彼は行くまい。

比況

九 比況の助動詞

- 一 人生は夢のやうだ。

てす	でせ	でし	です	○	○	○
----	----	----	----	---	---	---

やうだ	やうだら	やうだつ	やうだ	やうな	やうなら	○
助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令

一〇 希望の助動詞

- 一 早く故郷に歸りたい。

たい	たく	たく	たい	たい	たけれ	○
助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令

練習一八

練習

一 左の文中の助動詞を指摘してその種類をいへ。

- (イ) 彼に取つていかに苦戦だつたかは、之によつて察せられる。
- (ロ) 午後弟と書初をした。「鑑」の字がなか／＼むづかしかつたがそれでもよく出来たとにいさんにほめられた。
- (ハ) 長男は商業學校を卒業させて實業に就かせ、次男は陸軍士官學校に入學させて陸軍士官にした。
- (ニ) 明日雨は降るだらう、しかし風は吹かないだらう。
- (ホ) 「君は何か読んで見たいと思ふ書物はありませぬか。」かう問はれてすぐに書物の名の言へないのは恥だ。
- (ヘ) 今頃は定めしこちらの話をして居よう。
- (ト) 今日晝を習つた後で、一時間の散歩をした。
- (チ) 世人が今一層社會の安寧秩序を保つことに力めるやうになつたら、警察はむだな骨を折らないで、十分の効果を擧げることが出来よう。

動詞と助動詞との
接續

一 未然形につゞく助動詞

(イ) 受身(可能) 崇敬
る || 四段活用、ナラ變格活用
らる || 上下一、二段活用、カサ變格活用

東京に行かる。 父に死なる。
先生に褒めらる。 よく勉強せらる。

(ロ) 使役(崇敬)
さす || 上下一、二段活用、カサ變格活用
しむ || 全動詞

庭を掃かす。 君側に侍らす。
朝早く起きさす。 早く來さす。

第七章

文語動詞と文語助動詞との接續 (別表参照)

書を讀ましむ。 着物を着しむ。

(ハ) 現在完了ーリ 〓サ行變格活用

運動せり。

(ニ) 未來ーむ 〓全動詞。

雨降らむ。

鞠を蹴む。

(ホ) 推量ーましー全動詞。

春の心は長閑からまし。

(ヘ) 打消 じず ざり 〓全動詞。

字を書かず。

罪を受けじ。

勝つこと能はざりき。

(ト) 希望ーまほし 〓全動詞

花見に行かまほし。

許容事項

(一) らるがサ行變格の動詞に結びつく場合に「罪サル」「解釋サル」
と用ふるも妨げなし。

(二) さすがサ行變格の動詞に結びつく場合に「手習サス」「周旋サ
ス」「賣買サス」と用ふるも妨げなし。

(三) 「得シム」といふ場合に「得セシム」と用ふるも妨げなし。
使役 ア下ニ未然形

二 連用形につづく助動詞

(イ) 現在完了 ぬ っ 〓全動詞。

たり

書きもらしつ。

日は暮れぬ。

全軍を率ゐたり。

(ロ)

過去

けり

|| 全動詞

人死にき。

花散りけり。

但(一)きがカサ變格活用の動詞につゞく場合に限り左表のやうな例外がある。

	未然形	連用形
カ變	來 ^コ しか	來 ^キ しか
サ變	爲 ^セ しか	爲 ^ジ き

(二)ぬは十行變格の動詞にはつゞかない。

許容事項

サ行四段活用の動詞を助動詞の「ししか」に連ねて「暮しし時」過ししかばなどいふ場合を「暮せし時」過せしかばなどとすることも妨げなし。

(ハ)

推量 ーけん || 全動詞

いつの頃より興りけん。

(ニ)

希望 ーたし || 全動詞

博覽會を見たし。 いつ迄もこゝにありたし。

三 終止形につゞく助動詞

(イ)

推量

らむ べし めり らし

|| 全動詞

靜心なく花の散るらむ。

朝早く起くべし。

紅葉亂れて流るめり。

山の白雪積るらし。

(ロ) 打消—まじ || 全動詞。

雨降るまじ。

(ハ) 可能—べかり || 全動詞。

一日に十里の道は行くべかりしに……………

(ニ) 咏嘆—なり || 全動詞。

汝と今や別るなり。

蟲の聲すなり。

但、右の助動詞がラ行變格活用とむすびつく場合にはその連體形からつゞく。

君側に侍るべし。

有るらし。

などとなる。

四 連體形につゞく助動詞

(イ) 指定—なり || 全動詞。

夜は今明くるなり。

但、なりは又體言の下にもつゞく。

これは私の本なり。

指定のたりは用言の下にはつゞかないで、體言の下にだけつゞくから、用言の下のたりはすべて現在完了の助動詞であると心得ておいてよい。

(ロ) 比況—如し || 全動詞。

但、助詞「が」を挟んで動詞・形容詞の連體形に添はることが多い。

水の流るるが如し。

花の美しきが如し。

又、助詞「の」を挟んで名詞に添はることもある。

海の面鏡の如し。

五 已然形につゞく助動詞

現在完了—り || 四段活用に限る。

助動詞相互の接続

書を讀めり。 字を書けり。

助動詞相互の接続

助動詞は數個を併せ用ひて種々複雑な意義をあらはすことが出来る。そして其の接続には各定まつた法則がある。即ち動詞の未然形に連るものは、助動詞にも亦その未然形に連り、其他連用形終止形等皆動詞に連る場合と同じである。

日夜奔走せ

サ變未然形

使役未然形

受身連用形

時連用形

時終止形

しめ

られ

たり

き。

(未然形に連る助動詞)

(未然形に連る助動詞)

(連用形に連る助動詞)

○らんべしまじ等の如く、ラ行變格活用の動詞に限つてその連體形に連るものは、助動詞に於ても、ラ行變格活用に等しい助動詞には又その連體形に連るものである。

彼は既に中學校を卒業せしなるべし。

(ラ變ニ等シキ活用ノ連體形)

練習一九

練習

一次の文中の助動詞を指摘し、その接続法を述べよ。

- (イ) 淺草の鳩も淋しく思ふらん日ごと見なれしわれを見ぬため。
 - (ロ) 夏の初は青梅こそ心地よきものなれ。青葉のしげれる枝に眞青の實の珠をなせる美しといふにはあらねど清々し。
 - (ハ) 世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。
 - (ニ) 遙に忘れたるこし方も今更思ひだされて、消え入るばかりなり。
 - (ホ) 秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる。
 - (ヘ) 秋風に初雁がねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらむ。
- 二次の文に誤があれば正し、且つその理由を説明せよ。
- (イ) 公園内に車を乗り入るるべからず。
 - (ロ) 今日先生の出せし問題は甚だ解し易かりし。
 - (ハ) 吾は終夜眠らずして考へり。

- (ニ) 身體に害を及ぼせしは過度に勉強せし故なり。
- (ホ) 再び耳を傾けれど寂として聲なかりき。
- (ヘ) 君は未だ東京を見まじ。
- (ト) その文章は余に讀まし給へ。
- (チ) 弓を射らんとするものは、姿勢を正しふし、一本の矢をもあだにせじと思ひて心をゆるむべからず。
- (リ) 齡長ける人は年少の者を勞るべし。
- (ヌ) 汝が考ふ如く容易に破られまじ。
- (ル) 車内に餘地ある時は出入口に御立ち下されまじく候。
- (ヲ) 汝自ら爲し得ざることは、之を人に強ゆるべからず。
- (ワ) 我等の渴望しし平和の曙光は漸く見えそめぬ。
- (カ) 市の中央に大砲を据へて頻に打出せしかば、將軍勢に乗じて進みし。
- (ヨ) かの友は既に死にぬ。

- (タ) かゝる過は再びせまじ。
- (レ) 第一軍をして正面の敵を攻撃させたり。
- 三、動詞の未然形・連用形・終止形につゞく助動詞を列舉せよ。
- 四、指定のなりと咏嘆のなりとが動詞に接続する時、その接続のちがつてゐる點をあげよ。
- 五、指定のたりと時のたりとが文中にある時、その接続の上から見て、どんなにこれを區別するか。
- 六、現在完了の「り」と動詞との接続法をのべよ。
- 七、過去の「き」「し」「しか」とカ・サ變格活用の動詞との接続法をのべよ。

第八章 口語動詞と口語助動詞との接続

一 未然形につづく助動詞

読ま	れる	起き	られる
う	せる	受け	させる
ぬ(ない)	ぬ(ない)	来	まい
		せ(し)	よう

右の中、うは四段に、ようは四段以外の動詞につづく。但、ようと
ないとはサ變の活用に對してはしにのみつゞき、せにはつゞか
ない。

勉強しようと思ふ。(勉強せようは誤)

運動しない。(運動せないは誤)

まいは四段活用に對してはその終止形につゞき、サ變の活用

に對してはしにのみつゞき、せにはつゞかない。

書四段終止を讀むまい。

彼は感じまい。

二 連用形につづく助動詞

押した。たい。

三 終止形につづく助動詞

讀むまい。
霽れるらしい。

四 連體形につづく助動詞

書く
のだ。(のである)
やうだ。(やうである)

練習二〇

練習

左の文から助動詞を抜出して、そのつゞき方を説明せよ。

- (イ) もう一度ゆつくり考へて見よう。
- (ロ) 兄は野球をするらしく、弟は庭球をするらしい。
- (ハ) 那須の與一に扇の的を射させる。
- (ニ) 私にはどうしても信ぜられない。
- (ホ) たゞ一度で懲りさせたらしい。
- (ヘ) 湖水と思はれる邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。

第九章 助詞の用法

助詞の用法

助詞には色々あつて、その用法も亦複雑である。今その中で誤謬の生じ易いものについて其の用法を説明しよう。

一 ぞなんこそ

ぞ

舜何人ぞ。 連體形(打消) さる事は我は知らぬぞ。

右は文の終にぞを添へて強く指し示す意を表してゐる。ぞが活用語につく時は、その連體形を受ける。

五月待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞ連す。
體形(サ變)

奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき。
連體形(形容詞)

夕涼みよくぞ男に生れける。
連體形(咏嘆)

右は文の中程にぞを添へたもので、かやうな場合には下は連體形で結ぶのである。
連體形(ラ下二)

かく緩かになん流るる。
連體形(形容詞)

人と争はざるなん賢き。

なん

こそ

その人、貌よりは心なんまさりたる。連體形(完了)
右のなんもぞと同じく強く指し示す意を有する助詞で、下は連體形で結ぶのである。

物のあはれは秋こそまされ。已然形(ラ、四)

貌こそ美しけれ、心はむげに劣れり。已然形(形容詞)

死なば一緒にこそもかくもならぬ。已然形(未來)

右のこそはぞなんよりも一層強く指し示す意を有する助詞で、下は已然形で結ぶのである。

二、やか

かゝることありやなしや。終止形(ラ變)終止形(形容詞)

かゝることあるかなきか。連體形

か や

夜は靜かに眠らるや。終止形(可能)

夜は靜かに眠らるるか。連體形

霞か雲かはた雪か。

右は文の終にやかを添へて疑の意を表したもので、その活用語につく時はやは終止形を、かは連體形を受ける定めであるけれども、今はやも連體形を受けることが多い。(許容事項参照)

花や咲きし。連體形(過去) 誰かある。連體形(ラ變)

右は文の中程にやかを添へて疑の意を表したもので、下は連體形で結ぶのである。

君は甲乙の中いづれを選ぶか。
五の三倍は幾何なるか。

右の如く上に疑の語ある時は、下にかを用ふる定めであるけれ

反語

ども今はやを用ひることもある。(許容事項参照)

誰かその悲慘に涙を流さざるべき。

其の時悔ゆとも甲斐あらんや。

かくてやは果つべき。

水鶏のたゞくなど心細からぬかは。

右のやかは反語の意をあらはす。そしてかやうな場合には感動の助詞はを伴つてやはかほとして表れることが多い。

以上述べたやうに文の中程にぞなんこそやかがあると下は連體形又は已然形で結ぶのである。これを係結の法則といふ。但し口語にはこの法はない。

係結

係語 結語

ぞなんやか………連體形

こそ………已然形

係結の法則は以上のやうであるけれども、若しその文が接續の用をなす助詞によつて下に續けられる時は、その結びは表れな

いで直に下文に接續する。

珍しき春もあすとぞきこゆればくれなむ年を何か惜し

まむ。

淀川こそ洪水の害最もはげしきものなれば官廳の經營

苦心を極めたり。

練習二

練習

一次の文の係結について説明せよ。

(イ) 一莖の草花にも人の工のえ企つまじき美しさぞこもれる。

(ロ) 勉強に倦み給はん折は花なんこよなき慰めなる。

ば

三

ばとゆども

明日雨降らば延期せむ。

(ハ) 自ら春風に坐すといひけん心地のみこそせられしか。

(ニ) 重盛こそは正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。

(ホ) 偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。

(ヘ) そびらにははやこときれし將校の亡骸をかきのせてこそ立てりけれ。

(ト) 昨日こそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風の吹く。

二次の文の係結に誤あれば正し、且つ其の理由を説明せよ。

(イ) かの童ぞよく道を知ればつきて問はるべき。

(ロ) その戸を開きてこそ見んと思ひけん。

(ハ) 東寺の塔を松の間に墨がきなせる筆の力ぞ工なれ。

(ニ) 「貧家に生れたるぞ幸福なり」と古聖もいはれたる。

(ホ) 音に聞えし此の壇の浦こそ源平二氏が最後の決戦を爲しし古蹟なり。

とも
ど

明日天氣よくば旅行せむ。
今日雨降れば行かず。
水、清ければ大魚棲まず。
右のやうに**ば**が未然形に結びつく時は**假定**、已然形に結びつく時は**確定**の意味をあらはす。

口語では左の例のやうに已然形で**假定**、**確定**兩様の意味をあらはす。

明日雨が降れば延ばさう。

水が清ければ魚が棲まない。

鳥の鳴かぬ日はありとも親を思はぬ日はあらじ。

たとひ兵寡くともよもや敗るることはあらじ。

花咲けども鶯未だ來鳴かず。

ども

この品好ければども買はず。

右のやうにともが動詞の終止形・形容詞の未然形に結びつく時は假定、どもが動詞・形容詞の已然形に結びつく時は確定の意味をあらはす。

現代文では、誤解を生じない限りに於て、ともどもの代りにもを用ひることが許容されてゐる。(許容事項参照)

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

口語——てもけれどもても。

鳥の鳴かない日はあつても……………

品は好いけれども……………

茶は飲んでも……………

と

並列のと

四と

月と花と。 宗教と道德との關係。

京都と神戸と長崎とに行く。

事物を並列するとき、右の例のやうにその一々の下にとを添へる定めであるけれども、誤解を生じない時に限り、最終の語句の下に之を省いてもよろしい。(許容事項参照)

但、左のやうな場合には之を省くことが出来ない。

史記と漢書との列傳を讀むべし。

史記と漢書の列傳とを讀むべし。

北條時宗、幼名を太郎といふ。

あの川を澱川と呼ぶ。

右のとは動作の標準を示す。

動作の標準を示すと

上文を指示すると

月出づと見えて
太平洋の夜は、今明けなんとす。

右のとは上文を指示す。

右のやうにとが活用する語につく時は、終止形を受ける定めてあるけれども、現代文では連體形を受けることもある。

(許容事項参照)

五 だにすらさへ

七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞかな
しき。

鳥にだにしかず。

草木すら情あり。

行方すらも覺えず。

だに

すら

さへ

雨降り風さへ吹く。
涙をさへ落して喜びたり。

右の内だにすらは軽いことをあげて重いことを言外に思はせ、
さへはある上に更に添ひ加はる意味の助詞である。

口語ではだにもすらもなく、さへが一般に用ひられる。

鳥にさへ及ばない。

行方さへも分らぬ。

六 なな…そ

決して怠るな。ゆめ忘るな。危き場所に居るな。

右のやうになを動詞の終止形に添へると、その動作をすなと禁止する意味を表す。但、ラ變の動詞に限つて、その連體形に添はるのである。

かくなのたまひそ。

深くな咎めそ。

な

な…そ

ばや
なむ

吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山櫻かな
近く寄りて過なせそ。

な……そはなと同じく禁止の意味をあらはす。そしてこの場合
合にそは動詞の連用形を受ける。但、カサ變格の動詞に限つて、
その未然形を受ける。

七 ばやなむ

繪を巧に畫かばや。

我が子、學者にならなむ。

右のばやなむは願望の意をあらはし、共に未然形につく。

八 へ

學校へ行く。

大阪に住む。

前へ進む。

彼方へ向ふ。

が
に
を

右のには場所を示し、へは方向を示す。

口語ではへもににも同じやうに用ひられる。

學校へ行く。

東京へ行く。

九 がにを

大いに努力せしが遂に效なかりき。

日暮れたるに宿るべき家もなし。

いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるる野路
の村雨。

右のがにをは語句を接續する助詞で、活用する語の連體形に結
びつく。

口語ではがは文語と同じく、にをはのにに相當する。

一〇 して

て て

日くれて道遠し。
言はでやみぬ。 (ではすての變化したものである)
右のてでは語句を接續する助詞てでは連用形に、ては未然形に結びつく。

練習三

練習

一、左の文中の — の施してある助詞を説明せよ。

- (イ) 勉強さへすればどんなことでも出来る。
- (ロ) すべて月花をばさのみ目にて見るものは。
- (ハ) げに聞くだに涙の種ぞかし。
- (ニ) 良からぬ小説などな読み給ひそ。
- (ホ) 我に對する爲にはあらで、先生を敬する爲にてありけるよ。
- (ヘ) 月を見れども楽しからず、鳥を聞けども嬉しからず。

- (ト) 今朝來鳴きいまだ旅なる時鳥花橋に宿はからなむ。
 - (チ) 波風の靜かなる日も舟人はかぢに心を許さざらなむ。
- 二、左の文に誤があれば正し、且つその理由を述べよ。
- (イ) 今のうちに勉めすむば、老ひて後に悔ふれども及ばざらむ。
 - (ロ) この陣地さへ落せば他は憂ふるに足らず。
 - (ハ) 萬一失敗すれども決して落膽するべからず。
 - (ニ) 成績あしとも失望するに及ばず。
 - (ホ) 板垣死するとも自由は死せず。
 - (ヘ) 懇に戒めども馬耳東風と聞き流すのみ。
 - (ト) もし不都合の點あれば指摘せらるべし。
 - (チ) もし御差支も候へば御一報下されたく候。
 - (リ) 見事かの頭上の林檎を射落せば汝が命を助けん。
 - (ヌ) 車へ乗りて行かむ。

- (ル) 立錐の餘地さへなし。
- (ヲ) 雪だに生憎に降りいでて寒氣いよ／＼加はりぬ。
- (ワ) 敵衆しとも恐るるな。
- (カ) 石川や濱の眞砂は盡くるとも世に盗人の種はつきまじ。
- (ヨ) 世人に譏らるが心憂しのみ。
- (タ) 暮るを待たで旅館に宿る。
- (レ) 志を遂げんと欲すれば須く努力すべし。
- (ソ) 彼もし兄の剛健なるに似れば、死して身後の名を成さん。
- (ツ) 終日業務を取扱はしむるといふ。
- (ネ) 功を急ぎて過するな。

第十章 接頭語・接尾語

接頭語

一 接頭語

單獨では用ひられないで、ある他の語の上について、其の語と熟語をなすものを接頭語といふ。

さ夜、を川、み山、はつ春、うひ陣、第二番、た走る、ほ
 の見ゆ、か弱し、け高し、生やさし、もの寂し。

接頭語には意味を添へるものと、さうでないものがある。そして接頭語が添うて出来た熟語はもとの語と品詞を同じうする。

うち見る、さし招く、ひき受く。
 右のうちさしひきはもと動詞であるけれども、その本の意を失つて、接頭語となつたのである。

二 接尾語

單獨では用ひられないで、ある他の語の下について、其の語と熟

接尾語

語をなすものを接尾語といふ。友どち、奴ばら、君がた、壹圓、三號、二つづつ、厚み、黒さ、悲しげ、春めく、黄ばむ、男らし、夜すがら。

接尾語はいづれも或意味を添へるものである。そして接尾語の添うて出來た熟語は、接尾語の性質によつて品詞を異にする。

第十一章 品詞の轉成

轉成の名詞

一 轉成の名詞

- (イ) 動詞の連用形から 光 霞 氷 謠
- (ロ) 動詞の終止形から 茂シゲル 薫カケル 勝イカル以上人名。かげろふ。すまふ。

轉成の代名詞

轉成の副詞

二 轉成の代名詞

- (ハ) 形容詞の語根に接尾語みさを添ふ。厚み。重さ。
- (ニ) 形容詞の終止形から あかし(燈)。すし(鮓)。からし(芥子)。

三 轉成の副詞

- (イ) 名詞から 君。僕。小生。殿。臣。
- (ロ) 動詞の連用形から。今日雨降る。明日御歸りになりますか。たとひ雨降るとも……。それはあまりひどいことです。
- (ハ) 形容詞の連用形から。水能く流る。花少しく開く。

轉成の接續詞

(二) 形容詞の語幹に接尾語^レを添ふ。
悲しげに泣く。いと惜しげに見ゆ。

四 轉成の接續詞

(イ) 動詞から。

土曜日及び日曜日は休業す。

(ロ) 副詞から。

山また山を越ゆ。

練習三三

練習

一 左の文章中から接頭語と接尾語とを摘出せよ。

(イ) さ夜ふけてほの暗き御あかしの影ものさびし。

(ロ) 御刀の汚れにて候。雑卒ばらの手にかゝり給はば末代までの御恥辱にて候。

紛れ易い品詞

たり

- (ハ) 春來れば雪消の澤に袖垂れてまだうら若き若菜をぞ摘む。
- (ニ) 秋らしくなりていと露けし。
- (ホ) 同じ自然の御母の御手に育ちし姉と妹、み空の花を星といひ、わが世の星を花といふ。
- (ヘ) 色々御世話になりました。この御恩は決して忘れませぬ。

第十一章 紛れ易い品詞

多くの單語の中には、語形が同じで、品詞を異にするものがあり、又同じ品詞の中でも種類を異にするものが多いから、品詞を鑑別する場合に於ては、特にこれらの同形異義の語に注意せねばならぬ。左にその主なるものを説明しよう。

一 たり

なり

二 なり

書を読みたり。(現在完了の助動詞)

君君たり臣臣たり。(指定の助動詞)

山巍然たり。(ラ行變格動詞の語尾の終止形)

建築なりぬ。(動詞)

彼は學生なり。(指定の助動詞)

花の美しきなり。(指定の助動詞)

日暮るるなり。(指定の助動詞)

鐘の音すなり。(咏嘆の助動詞)

らむ

三 らむ

取らむ。(らは動詞の語尾、むは未來の助動詞)

花の散るらむ。(推量の助動詞)

なむ

四 なむ

散りなむ。(なは現在完了の助動詞、ぬの未然形、むは未來

の助動詞)

咲かなむ。(願望の助詞)

月なむ見ゆる。(係の助詞)

ぬ

五 ぬ

花咲きぬ。(現在完了の助動詞)

花の咲かぬ枝。(打消の助動詞の連體形)

な

六 な

ゆめ忘るな。(禁止の助詞)

忘れじな。(感動の助詞)

花散りなば。(現在完了の助動詞、ぬの未然形)

しか

七 しか

昨日こそ早苗とりしか。(過去の助動詞きの已然形)

君は何時歸りしか。(しは過去の助動詞きの連體形、かは

疑問の助詞)

し

八 し

來し方行く末の事おもひやらる。(過去の助動詞のきの

連體形)

かゝることなきにしもあらず。(強めのし)

ばや

九 ばや

まだしき程の聲を聞かばや。(願望)

心あてに折らばや折らむ。(假定の助詞ばに疑問の助詞

やを添へたもの)

に

一〇 に

紅葉すればや照りまさるらむ。(確定の助詞ばに疑問の

助詞やを添へたもの)

木枯吹きに吹く (動詞の連用形をうけ、下に同じ動詞を

重ねて、その意味を強める)

秋は來にけり。(現在完了ぬの連用形)

山に嘉木あり、海に珍魚あり。(位置を示す助詞)

夜の明けたるに何とて起き出でざる。

(連體形をうけ、反對の意を示す助詞)

練習二四

練習

左の文中傍線を施した語の文法上の差異を述べよ。

(イ) かくこそ思ひしか。いつの年うせ給ひしか。

(ロ) 死にし子顔よかりき。

露と消えにし命かな。

(ハ) 汝と今や別るなり。

汝と今別るるなり。

その謀空しくなりぬ。

(ニ) 今日來鳴きいまだ旅なる時鳥花橋に宿はからなむ。

花なむこよなき慰めなる。

見る人もなき山里の櫻花外の散りなむ後ぞ咲かまし。

(ホ) 花の色はうつりにけりな。

主なしとて春な忘れそ。

(ヘ) 死にたる人。

人の人たる道。

(ト) つきぬ怨。

糧食つきぬ。

(チ) 生きとし生けるもの。

生き残りしもの。

文章篇

第一章 文の成分

主語述語

一 犬 走る。

鳥 飛ぶ。

魚が 躍る。(口)

二 山 高し。

水 清し。

主語・述語

大軍 雲霞の如し。

花が 美しい。(口)

三 正成は 忠臣なり。

犬は 動物だ。(口)

右の例の(一)は「何がどうする」(二)は「何がどんなだ」(三)は「何が何だ」といふ形式の文である。そして「何が」に當るもの、即ち文の題目を表す語を主語といひ、「どうする」「どんなだ」「何だ」に當るもの、即ち敘述を表す語を述語といふ。主語と述語とは如何なる文にも缺くことの出来ぬものであるから、これを特に文の主成分といふ。

一 鳥 鳴く。
風 涼し。

文の主成分

二 われも 歸る。

空は 青し。

右の例のやうに、主語は體言が單獨に表れる場合と、下に助詞の添うて表れる場合とがある。

死ぬるは 悲し。

赤きが よし。

右の例のやうに、主語は又體言に準ずべき語からなることがある。

一 白雲 飛ぶ。

月 清し。

二 夜も 明けたり。

花 咲きぬ。

三 旅行は 樂しかりしか。
右の例のやうに、述語は用言からなり、更にこれに助動詞・助詞が添うて表れるものである。

一 尊氏は 逆臣なり。

君 君たり。

怒濤 山の如し。

二 花の 散るなり。

水の 清きなり。

歲月 流るる(が)如し。

右の例のやうに、述語は又體言若しくは用言の下に、指定の助動詞なりたり、比況の助動詞如し等が連つた語から成ることがある。

修飾語

修飾語

一 赤き花 咲く。

二 風 烈しく吹く。

山 甚だ高し。

右の例で、形容詞赤きは花を修飾し、副詞烈しくは吹くを、副詞甚だは高しを修飾してゐる。かやうに文中にあつて他の語を修飾する語を修飾語といふ。そして赤きのやうに體言を修飾するものを形容詞的修飾語といひ、烈しく、甚だのやうに用言を修飾するものを副詞的修飾語といふ。

形容詞的修飾語

我が庭に 美しき朝顔 咲けり。
静かなること 林の如し。

形容詞的修飾語

長閑な光が 油のやうな海面に融けてゐる。(口)
 進歩主義は 有爲なる國民の忘るべからざる要訣なり。
 渦巻く波に とび込んだ。(口)
 寒からぬ雪は 雲なき空よりこぼれて顔を撲つ。
 右のやうに形容詞的修飾語は形容詞の連體形若しくはこれに
 準ずる語である。

副詞的修飾語

副詞的修飾語

食指 おのづから 動く
 太閤は 平常 鶴を 愛せられたり。
 鐵道 不通に なること 往々にして あり。
 津々として 詩趣を 生ず。
 一切の物音は はたと 絶えた。(口)

今朝 東京へ向けて 出發した。(口)
 午後一時より 講演會を開く。
 あちらへ行け
 今度はやめます。(今度はは主語ではない。)(口)
 春はくれども 花 咲かず。
 右のやうに副詞的修飾語は副詞若しくは副詞に準ずる語であ
 る。

猫 鼠を 捕ふ。
 太郎は 級長と なつた。(口)
 面は 猿に 似たり。
 二の三倍は 六に 等し。
 父 家を 子に 譲る。

客語

獨立語

接續の語

同格の語

呼掛の語

次の一隊は、大山中尉に引率せられて、川を渡れり。
犬人に打たる。

上文の傍線の引いてある語は、それ／＼に用言を修飾する。かやうに體言に助詞とをにの結合してゐるものを特に客語といふ。
獨立語

- 一 天氣晴朗なり。されど波高し。
生徒は數學を學び、次いで英語を學びたり。
- 二 執權義時は弟時房と長男泰時とを都に遣したり。
爾臣民、父母に孝に、兄弟に友に。
- 三 太郎やおまへもう學校に行かないかえ。(口)
あれ見給へ、箱王殿。空をとぶ翼も皆別の翼をぞまじへざりける。

感動の語

提示の語

- 四 やあ、いかにあれなるは佐野源左衛門の尉常世か。
あゝ、花が咲いた。(口)
 - 二 太郎は、性、理學に長ず。
大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す。
- 右の例のされど次いで接續の語、執權弟長男、爾、同格の語、太郎や、箱王殿、呼掛の語、やあ、いかに、あゝ、感動の語、太郎は、大日本帝國は、提示の語は、文の成立には關係のないものである。かやうな語を獨立語といふ。

練習二三

練習

左の文中から、主語、述語、修飾語、獨立語を摘出し、猶、修飾語はそのいづれの語を修飾してゐるかを説明せよ。

(イ) 中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といふ。

- (ロ) ねむさうな雞の聲のする村もすぎけたましく犬の吠えかゝる村も過ぎた。
- (ハ) 天下の事つとめてやますんば遅くとも一たびは成就すべし。
- (ニ) 神殿を組織する一本の柱にも、悉く皆國民の燃えるやうな熱誠が籠つて居る。
- (ホ) 健全なる精神は、健全なる身體に宿る。
- (ヘ) 西山の花見る人は、多く御室を指す。
- (ト) 正確なる知識は、鋭利なる機械の如し。
- (チ) 兎は前足が短い。
- (リ) 帝國議會は毎年之を召集す。
- (ヌ) 拍手急霰に似たり。
- (ル) 誦經の聲遠く響きて、鶯の歌とこしなへに高き梢にあり。
- (ヲ) 彼は、性質極めて温順なり。

- 正序法
- (一) 主 述
- (二) 主 客 述

一 正序法

- (ワ) いかにも母御前、父はいづくにおはしますぞや。
- (カ) 鐘が鳴つた。それでも授業は始まらない。
- (ヨ) あゝ、わが運命もこれにて定まれるか。
- (タ) 少納言よ、香爐峯の雪はいかならん。
- (レ) 不忍の池詩人、これを小西湖といふ。
- (ソ) 象は體大なり。
- (ツ) 我が少年諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。

第二章 文の成分の位置と省略

一 正序法

- 庭主ノ修の朝顔主、美しく咲けり述ノ修。
- 隣家主ノ修の猫主、大きな鼠客ノ修を巧客に捕へたり述ノ修。

右の文は成分の位置の普通なものである。これを正序法といふ。そして主語は述語の前、修飾語は被修飾語の上に来るのが普通である。

倒序法

二 倒序法

一 美なるかな山河主のかため。

二 たれてすか、君主は。

三 雲述のいづこ修に月主やどるらむ。

四 僕客の本をだれ主が持つていつたらう。

右は文の語調を調べ、或は語勢を強めるために、文の成分の位置を替へたものである。これを倒序法といふ。

省略法

三 省略法

一 人を相手にせず、天を相手にせよ。

二 この處に塵芥捨つべからず。

三 福は内、鬼は外。

四 彼は末頼しき少年にこそ。

五 神よ、願はくは助け給へ。

六 さて主上はいづこにおはしますぞ。黒戸の御所に。上

皇は。一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劔璽はい

づこに。夜の大殿に。

右の(一)(二)は主語、(三)(四)は述語、(五)は客語、(六)は種々の成分の省略されたものである。かやうに文はまた、冗長を避け、文意を強めるがために、其の成分を省略することがある。これを省略法といふ。

練習二四

練習

左の文中にある倒序法・省略法について説明せよ。

- (イ) 油断大敵
- (ロ) 祝へ諸人もろともに。
- (ハ) 人の噂も七十五日。
- (ニ) 人は誹るとも、我は咎めず。
- (ホ) 千里の道も足もとより。
- (ヘ) とまれ蝶々、さく花に。
- (ト) 牛馬繫ぐべからず。
- (チ) われに惜むな、家づとの一枝の筆の花の色香を。
- (リ) 道路の左側を通行すべし。
- (ヌ) 春來ぬと人はいへどもうぐひすの鳴かぬ限はあらじとぞ思ふ。
- (ル) 愉快だつたね、ほんたうに昨日の遠足は。
- (ヲ) たれかあはれと聞かざらん、あはれ血に泣くその聲を。

句

句

- (ワ) 降る雪にきこりの道もうもれけり。

第三章 句及び節

- 一 香の高きは梅の花なり。
 - 二 かしこに松の生ひ茂れる岡あり。
 - 三 水清ければ大魚棲まず。
- 右の例の傍線の引いてある部分は、いづれも文がその獨立を失つて他の文の一成分となつてゐるものである。これを句といふ。句には名詞句・形容詞句・副詞句の三種がある。
- 一 名詞句―名詞の用をなすもの。
 - 一 香の高きは梅の花なり。―(主語)

名詞句

形容詞句

二 われは時のうつるを知らざりき。 (客語)
二 形容詞句 形容詞の用をなすもの。

一 雨の降る夜はもの寂し。

二 瀑の落つる音は百雷の轟く響に似たり。

三 副詞句 副詞の用をなすもの。

一 水清ければ大魚棲まず。

二 天氣晴朗なれども波高し。

節

一 東寺の塔はわれを迎へて立つ。

二 鴨川の水はわれを迎へて歌ふ。

右は何れも一つの文である。今これを重ねて、

東寺の塔は、われを迎へて立ち、鴨川の水は、われを迎へて

といふと、又一つの文となる。この場合で傍線の部分は各、對立したもので、一方が他の一方の成分ではない。この各の部分を節といふ。

練習三五

練習

一、左の文中の句と節とをあげ、且つ句についてはその何句であるかを答へよ。

(イ) 味のよき魚は波の荒き海に住む。

(ロ) 能ある鷹は爪をかくす。

(ハ) 無理が通れば道理が引込む。

(ニ) 水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友による。

(ホ) 腦の良いのは一生の徳だ。

(ヘ) 残暑凌ぎ難けれど、樹間叢裡已に秋の聲あり。

歌ふ。

構造上の種類

- (ト) 自分は身中に健康の充ち溢れるのを覺えた。
 - (チ) 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ。
 - (リ) 月明かに星稀なり。
 - (ヌ) 前車の覆るは後車の戒なり。
 - (ル) 花咲く春はいと樂し。
- 二、句と節との區別を述べよ。
- 三、例をあげて句の種類を説明せよ。

第四章 文の構造上の種類

單文

- 文は構造上から左の三種に分類することがある。
- 一 單文
 - 一 鳥啼く。
 - 二 秋風衣を撲つ。

複文

- 三 われ花を嵐山に觀る。
- 右は主語と述語との關係が唯一回成立してゐる文であつて、かやうな文を單文といふ。
- 二 複文
 - 一 春副詞句は來れども 鶯鳴かず。
 - 二 景色名詞句の麗しきは 天橋立なり。
 - 三 景色形容詞句の麗しき天橋立は 丹後國にあり。
- 右は一つ以上の句を含み、主語と述語との關係が二回以上成立してゐる文であつて、かやうな文を複文といふ。
- 三 重文
 - 一 花咲き 鳥啼く。
 - 二 病は口より入り、禍は口より出づ。

三 吉野山は花に宜しく、龍田川は紅葉に宜し。
 右のやうに二つ以上の節から成る文を重文といふ。
 文は單文・複文・重文の三種に分かれるとはいふものの、時としては頗る複雑なものがある。今二三の例を次に示さう。

- 一 氣霽れては風新柳の髪を梳り、氷消えては浪舊苔の鬚を洗ふ。
(複文二つか
ら成る重文)
- 二 學問が出来るとからだは弱いし、からだは強いと學問が出来ない。(同上)
- 三 我が國には山紫に、水明なる佳景多し。
(重文を含
む複文)
- 四 雨は降り、雷は鳴つても、あの人は平氣でをる。(同上)

第五章 文の性質上の種類

性質上の種類

平敘文

文は性質上から左の四種に分類することが出来る。

一 平敘文

- 一 雨降り風吹く。
- 二 猛虎一聲山月高し。
- 三 山高く月小なり。

右の例のやうに、單に事實をありのままに敘述する文を平敘文といふ。

二 疑問文

- 一 わが艦の敵に降れるものなきか。
- 二 雲の何處に月宿るらむ。
- 三 誰か最も賢き。
- 四 精神一到何事か成らざらむ。

疑問文

右の例のやうに、疑問の意をあらはすもの、或は反語の意をあらはす文を疑問文といふ。

命令文

三 命令文

- 一 よく學びよく遊べ。
- 二 早く着物を着よ。
- 三 明日午前八時出頭すべし。
- 四 無用のもの入るべからず。
- 五 主なしとて春な忘れそ。

右の例のやうに、命令禁止の意を表す文を命令文といふ。命令文には普通、主語が省略される。

感動文

四 感動文

- 一 あはれ、この幾ひらこそまたも得難き形見なれや。

二 忠なるかな楠氏。

三 あゝ、はな／＼しくも果敢なかりし君が一生かな。

四 もうそんなになるのかなあ、卒業してから。(口)

右の例のやうに、感動の意を表す文を感動文といふ。感動文には主成分の完備しないことが多く、又成分の倒置せられることが極めて多い。

右に説いたやうに、成分の倒置省略は文の性質に關することが多いものである。

練習二六

練習

- 一、次の文は構造上及び性質上どんな種類に屬するか。
- (イ) 春は花をめで、秋は紅葉をあはれむ。
- (ロ) あはれ、今年の秋も往ぬめり。

- (ハ) 昨日は東に走り、今日は西に走る。
- (ニ) 明日天氣よくば、旅行し給ふか。
- (ホ) 芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞く。
- (ヘ) 枯枝に鳥のとまりけり秋の暮。
- (ト) 一旦事あらば、吾人は身命を捧げて國家を防護すべし。
- (チ) 英國は各自がその本分を盡くさんことを期待す。
- (リ) 勝つことばかり知りて、負くることを知らざれば、禍その身に至る。
- (ヌ) 秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。
- (ル) 年豊かなれば詣り謝し、天旱すれば雨を乞ふ。
- (ヲ) 堪忍は無事長久の基。
- (ワ) 怒は敵と思へ。
- (カ) 家陋なりといへども、膝を容るべく、庭狭しといへども、碧空を望むべし。
- (ヨ) 湊川は楠木正成の戦死せし所なり。

- (タ) 人も學びて後にこそ、誠の徳はあらはるれ。
- (レ) 無理が通れば、道理が引込む。
- (ソ) 義は金銭よりも堅く、死は鴻毛よりも輕し。
- (ツ) 月霜の如く地に冴え、風海の如く空に吼ゆ。
- (ネ) 用があつたら、手を鳴らします。
- (ナ) 十五夜の月、皎々として清き光を放ちぬ。
- (ラ) 雪は野山を埋むとも、老いたる馬ぞ道は知る。
- (ム) 山は高けれど、限りあり、海は深けれど、そこひあり。

訂六 中等新國文典終

附錄 文法上許容ニ關スル事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。
例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。
- 四 「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。
- 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
例 手習サス。
周旋サス。
賣買サス。
- 六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

ナシ

例 罪サル。

評サル。

解釋サル。

七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ズルコトヲ得セシムベシ。

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイ

フベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドスルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九 てにをは「ノ」ハ動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連続スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一 てにをはノ「ト」ハ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習

慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一二 てにをはノ「ト」ハ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連

續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

一三 語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤謬ヲ生ゼザルトキニ限リ最

終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五 てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例 何等ノ事由アルモ「アリトモ」議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ「タレドモ」準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ「シカドモ」昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ「ストモ」之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ「ケレドモ」應募者ハ多カルベシ。

一六 (トイフ)トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承諾セララルモノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格、又ハ、誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ、中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ文部省ニ於テハ、從來、破格、又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ、之ヲ許容シテ、在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニ之ヲ應用セントス。

(明治三十八年十二月二日 文部省告示第百五十八號)

口語動

四段		
有	死	書
ラ	ナ	カ
リ	ニ	キ
ル	ヌ	ク
ル	ヌ	ク
レ	ネ	ケ
レ	ネ	ケ

愚問

愚問の語は、口語動の四段に属する。有、死、書、ラ、ナ、カ、リ、ニ、キ、ル、ヌ、ク、ル、ヌ、ク、レ、ネ、ケ、レ、ネ、ケ。此の語は、口語動の四段に属する。有、死、書、ラ、ナ、カ、リ、ニ、キ、ル、ヌ、ク、ル、ヌ、ク、レ、ネ、ケ、レ、ネ、ケ。

【表二第】

用活詞容形語口			用活詞容形語文		
シク活用	ク活用	種類	シク活用	ク活用	種類
涼	清	語幹	涼	清	語幹
○	○	未然	シク	ク	未然
シク	ク	連用	シク	ク	連用
シイ	イ	終止	シ	シ	終止
シイ	イ	連體	シキ	キ	連體
シケレ	ケレ	假定	シケレ	ケレ	已然

【表一第】

表用活詞動語口

サ行變格	カ行變格	下一段	上一段	四段	種類	活用の				
(爲)	(來)	(蹴) 兼	(着) 起	有 死 書	語幹					
シセ	コ	ケ	ネ	キ	キ	ラ	ナ	カ	未然	活用 用 形
シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	リ	ニ	キ	連用	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	終止	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	連體	
スレ	クレ	ケレ	ネレ	キレ	キレ	レ	ネ	ケ	已然	
シセヨ	コイ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	レ	ネ	ケ	命令	

表用活詞動語文

ラ行變格	ナ行變格	サ行變格	カ行變格	下一段	下二段	上一段	上二段	四段	種類	活用の
有	死	(爲)	(來)	(蹴) 兼	(着) 起	書			語幹	
ラ	ナ	セ	コ	ケ	ネ	キ	キ	カ	未然	活用 用 形
リ	ニ	シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	キ	連用	
リ	ヌ	ス	ク	ケル	ヌ	キル	ク	ク	終止	
ル	ヌル	スル	クル	ケル	スル	キル	クル	ク	連體	
レ	ヌレ	スレ	クレ	ケレ	ヌレ	キレ	クレ	ケ	已然	
レ	ネ	セヨ	コヨ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	ケ	命令	

[表 三 第]

表 用 活 詞 動 助 語 文

指 定			打 消			推 量			時					崇 使 敬 役			可 能				崇 受 敬 身		の 種 類	助 動 詞		
な	た	な	じ	ざ	ず	ま	べ	け	ら	む	き	け	り	た	ぬ	つ	し	さ	す	べ	べ	ら	る	ら	る	語
り	り	り		り		じ	し	む	む			り	り				む	す		り	し	る	る	る	る	
	ら		○	ら	ず	く	○	○	○	○	○	ら	な	て	め	せ	ら	く	れ	れ				れ		未 然
	り		○	り	ず	く	○	○	○	○	○	り	に	て	め	せ	り	く	れ	れ				れ		連 用
	り		じ	り	ず	し	む	む	き	○	○	り	ぬ	つ	む	す	(り)	し	る	る				る		終 止
	る		じ	る	ぬ	き	む	む	し	○	○	る	ぬ	つ	む	する	(る)	き	る	る				る		連 體
	れ		じ	れ	ね	けれ	め	め	しか	○	○	れ	ぬ	つ	む	す	(れ)	けれ	る	る				る		已 然
	れ		○	れ	○	○	○	○	○	○	○		ね	て	め	せ	○	○	○	れ				れ		命 令

[表 四 第]

表 用 活 詞 動 助 語 口

希 望	比 況	指 定		打 消	推 量	時			崇 敬			使 役		可 受 能 身		の 種 類	助 動 詞	
		だ	ぬ			よ	う	た	ま	ら	れ	さ	せ	ら	れ			
たい	やうだ	です	だ	ぬ	ない	らしい	よう	う	た	ます	られる	れる	させる	せる	られる	れる	語	
い	やうだ <small>ら</small>	でせ	だら	○	○	○	○	た	ら	せ	れ	せ	れ			未然		
く	やうだ <small>つ</small>	でし	で <small>だつ</small>	○	く	く	○	た	り	し	れ	せ	れ			連用	活	
い	やうだ	です	だ	ぬ <small>(ん)</small>	い	い	う	た	す	す	れる	せる	れる			終止	用	
い	やうな	○	○	ぬ <small>(ん)</small>	い	い	○	た	す	す	れる	せる	れる			連體		
けれ	やうな <small>あ</small>	○	○	ね	けれ	○	○	た	ら	す	れ	れ	せ	れ	れ	假定	形	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	し	せ	ろ	よ	せ	ろ	よ	命令		

[表 三 第]

表 用 活 詞 動 助 語

希 望	比 況	咏 嘆	指 定		打 消			推 量				時							
			た	な	じ	ざ	す	ま	べ	け	ら	む	き	け	り	た	ぬ	つ	
た	ごと	け	な	た	な	じ	ざ	す	ま	べ	け	ら	む	き	け	り	た	ぬ	つ
し	し	り	り	り	り				ま	し	む	む							
く	く	○		ら	○	ら	す	く	○	○	○	ら	な	て					
く	く	○		り	○	り	す	く	○	○	○	り	に	て					
し	し	り		り	じ	り	す	し	む	む	き	り	ぬ	つ					
き	き	る		る	じ	る	ぬ	き	む	む	し	る	ぬ	つ					
けれ	○	れ		れ	じ	れ	ね	けれ	め	め	しか	れ	ぬ	つ	れ				
○	○	○		れ	○	れ	○	○	○	○	○		ね	て	よ				

【表 六 第】

法續接のと詞容形・詞動と詞助續接

詞 容 形	詞 動
と も ば	で ば
	つ つ て
	と も と
に を が	に を が (と も) と
ど も ど ば	ど も ど ば

○括弧内のは今文にのみ用ひらるゝもの。

六 第

[表 五 第]

形・詞動と詞助續接

動	ば	未然
で	て	連用
つ	と	終止
とも	と	連體
(とも)	ば	已然
ども		

法續接詞動助詞動

り (サ變に 限る)	じ	ざ り	す	む	し む	さ り <small>(上・下・二 サ變終活用 用に限る)</small>	す <small>(四段・ラ變 終活用に限る)</small>	ら る <small>(上・下・二 サ變終活用 用に限る)</small>	る <small>(四段・ラ變 終活用に限る)</small>	未然形に
			た し	け む	け り	き <small>(カサ變終活用 に例外がある)</small>	た り (時)	ぬ	つ	連用形に
			な り (咏嘆)	ま じ			べ か り	べ し	ら む	終止形に
								ご と し	な り	連體形に
									り <small>(四段 活 用に限る)</small>	已然形に

なりは體言
にもついで
如しは助詞
の、がにつ
づくこと
ある。

ラ變に
限る

[表 六 第]

法續接のと詞容形・詞動と詞助續接

詞 容 形	詞	動	
とも ば		で ば	未 然
		つつ て	連 用
		とも と	終 止
に を が	に を が	(とも) と	連 體
ども ど ば	ども	ど ば	已 然

○括弧内ものは今文にのみ用ひらるゝもの。

[表 五 第]

法續接詞動助詞動

り (サ變に 限る)	じ	ざ り	ず	む	し む	さ す (上・下・一・ 二・段・カ・ サ・變・格・活 用に限る)	す (四段子・ラ變 格活用に限る)	ら る (上・下・一・ 二・段・カ・ サ・變・格・活 用に限る)	る (四段子・ラ變 格活用に限る)	未 然 形 に
			た し	け む	け り	き (カ・サ・變・格・活 用に限る。例 外がある)	た り (時)	ぬ	つ	連 用 形 に
			な り (咏嘆)	ま じ			べ か り	べ し	ら む	終 止 形 に
								ご と し	な り	連 體 形 に
									り (四段活 用に限る)	已 然 形 に

なりは體言
にもつとく
如しは助詞
のことがつ
ぶくこと
ある。

ラ變に限り
づ連體形につ

文部省檢定

昭和八年十月十日 實業學校口語科用



昭和七年十一月二十五日印
昭和七年十一月二十八日發
昭和八年九月二十七日訂正再版印刷
昭和八年九月三十日訂正再版發行

六中等新國文典

定價 金五拾八錢

著者 吉澤義則
京都市左京區修學院西沮澤町四

發行者 鈴木政雄
東京市神田區表神保町二番地

發行所 鈴木常松
大阪府東區博勢町五丁目五十六番地

發行所

東京市神田區表神保町二番地
振替口座(東京二六四四番)
大阪府東區博勢町五丁目五十六番地
振替口座(大阪四七一番)

東京修文館
大阪修文館

文淵閣書目

經部	易經	詩經	書經	禮記	春秋	四書	五經
史部	通鑑	綱目	資治通鑑	皇朝通志	皇朝通志	皇朝通志	皇朝通志
子部	論衡	論語	孟子	荀子	韓非子	呂氏春秋	淮南子
集部	詩經	楚辭	漢書	魏書	晉書	宋書	齊書
雜部	雜錄	雜錄	雜錄	雜錄	雜錄	雜錄	雜錄

文淵閣



市商
商

二西

永
周

修文館發行

文庫
33
425

広島大学図書

2000052425

資料室

375.9

Y6 19 吉澤義則

中等新國文典 訂正再版

修文會館 昭和8

155p 22cm

K52425

資料室

375.9

Y619

吉澤義則

中等新國文典 訂正再版

修文館 昭和8

155p 22cm

K52425

資料室

375.9

Y619 吉澤義則

中等新國文典 訂正再版

修文會館 昭和8

155p 22cm

K52425

資料室

375.9

Y619 吉澤義則

中等新國文典 訂正再版

修文會館 昭和8

155p 22cm

K52425